令和６年度　研究推進の概要

上越教育大学附属幼稚園

１　研究テーマ

つながる保育（２年次）　　～　園と園のつながりを広げ、深める　～

２　研究テーマについて

令和５年４月、「こどもまんなか社会」の実現を目的に、こども家庭庁が発足した。令和５年 12 月には「幼児期までの子どもの育ちにかかわる基本的なビジョン」が示され、子どもの豊かな育ちにかかわる社会全体の認識を共有していく必要性がより強調されている。

中央教育審議会「学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について」では、「幼児教育施設においては、複数の施設類型が存在し、それぞれが特色ある幼児教育を展開していることから、小学校との接続の基盤となる幼児教育施設間の横の連携強化に取り組むこと」の重要性が示されている。園と園が施設類型を超えて連携することにより、幼児教育・保育の質にかかわる認識を共有していくことが大切であり、その認識の共有が架け橋期のカリキュラム作成の基盤にもなるということである。互いの園の文化に触れあいながら学び合うことにより、相互に保育の質を高めていく関係性を構築していくことで、保育の質にかかわる認識を共有し、地域全体として、より質の高い幼児教育・保育を目指していくことが大切である。

そのような幼児教育を取り巻く状況の中、本園では令和５年度より新たな研究テーマを「つながる保育」と設定した。今後さらなる保育の質の向上を目指していくためには、保育観を共有している職員との語り合いや保育の評価にとどまらず、園の垣根を越えて互いの保育について語り合うことによって、保育観を耕していくことが必要であると捉えた。そこで、「子どもの豊かな育ちを支えたいという思いの共有のもと、多様な考えにふれ合う中で保育を更新したり、交流するよさを実感したりする関係性」を「つながり」と定義し、「つながり」の中で更新していく保育を「つながる保育」と呼ぶことにした。本園が他園とつながりをつくることで、本園の保育の質をさらに向上させること、幼児教育・保育の質への理解を共に深めることを目指し、地域における国公立の園の果たす役割について検討していくこととした。

１年次の研究を終え、互いの園の思いを擦り合わせていく過程において、新たに「交流だより」「公開カンファレンス」「合同研修」「合同保育」の交流のかたちが生まれ、園と園のつながりをつくるためのしくみが見えてきた。これらの交流の取組を通して、新たな見方や考え方を得たり、当たり前だと考えていたことを問い直したりして、保育観が耕されていく実感を得た。交流を通して、園と園の「つながり」は互いの保育観への共感によって生まれるのではないかと捉えた。また、本園での交流が、他園の情報を得られる場として機能している実感もあり、本園がいわゆる幼児教育・保育の「ハブ」のような役割を担えるのではないかという展望も見えてきた。

一方で、継続的な「つながり」をつくることが課題となった。１年次の交流の中で、異なる文化や価値観をもった園と園の「つながり」は簡単にできるものではないと実感した。互いの文化への共感が生まれるためには、多様な見方や考え方を知り、絶えず保育を捉え直していくことが必要であると考えた。また、交流をする上で、交流時間の確保の難しさ、交流を行う職員のリソース不足、交流をする職員の変更があったとしても、「つながり」を持続可能にしていくようなしくみが必要であると考えた。

そのために、1 年次研究の中で実施してきた「交流だより」「公開カンファレンス」「合同研修」

「合同保育」が、どのように保育の捉え直しにつながっているのか、どのように交流するよさの実感につながっているか、どのような交流がハブのような役割を担うのか、どのように持続可能な交流をつくっていくかを検討していく必要性を感じている。継続して交流し、「つながり」を広げ、深めていく中で、そのしくみを整えていきたいと考える。

これらのことを踏まえ、２年次研究では、研究副題を「園と園のつながりを広げ、深める」と設定した。１年次研究のなかでつくってきた「つながり」を基盤として、継続的に交流をすることによって園と園の「つながり」を広げ、深めることを目指し、そのしくみを整えていくこととした。

３　研究計画と研究の内容

第１年次「園と園とのつながりをつくる」（令和５年度）

・園と園との「つながり」をつくることを試みる中で、本園の保育を捉え直す。

・園と園との「つながり」をつくるしくみを探る。

第２年次「園と園とのつながりを広げ、深める」（令和６年度）

・継続的な「つながり」の中で、より質の高い保育のあり方を考え、本園の保育を捉え直す。

・園と園との「つながり」をつくるためのしくみを整える。

第３年次（令和７年度）

・園と園とのつながるしくみを確かなものにしながら、他校種とのつながりを試みる。

・園と園との「つながり」をつくる役割を担う園の在り方について検討する。

４　研究方法（第２年次）

（１）交流の継続的な実践と検討

１年次研究でつくってきた「交流だより」「公開カンファレンス」「合同研修」「合同保育」の交流を継続的に行う。これらの交流を実施する中で、保育観の耕しにつながるような交流、つながるよさを実感できる交流、ハブのような役割を担う交流、持続可能な交流になっているかということを視点に検討し、必要に応じて交流のかたちを更新していく。検討していく際、交流にかかわる幼児のエピソード事例、カンファレンスの記録、交流の検討プロセスの記録、他園からの交流後の感想を基に行う。

（２）大学や研究協力園との連携

①研究協力園との連携

１年次研究における研究協力園（以下、Ｒ５協力園）とは、継続した交流を行う。２年次研究における研究協力園（以下、Ｒ６協力園）には、２年間の継続した交流の意味や価値について助言を依頼する。Ｒ５研究協力園と交流をする際には、Ｒ６協力園以外の園にも呼びかけを行い、交流に多くの園が携われるようにしていく。

②大学との連携

「つながり」をつくる過程で、大学との連携を行い、専門的な立場からの意見を依頼する。「交流だより」における保育実践や交流への価値づけ、交流のもちかたについての助言、他園の悩みや迷いに応じて大学教員からの指導を受ける機会の設定など、より質の高い保育の捉え直しや、「つながり」を広げ、深めるための示唆を得る。

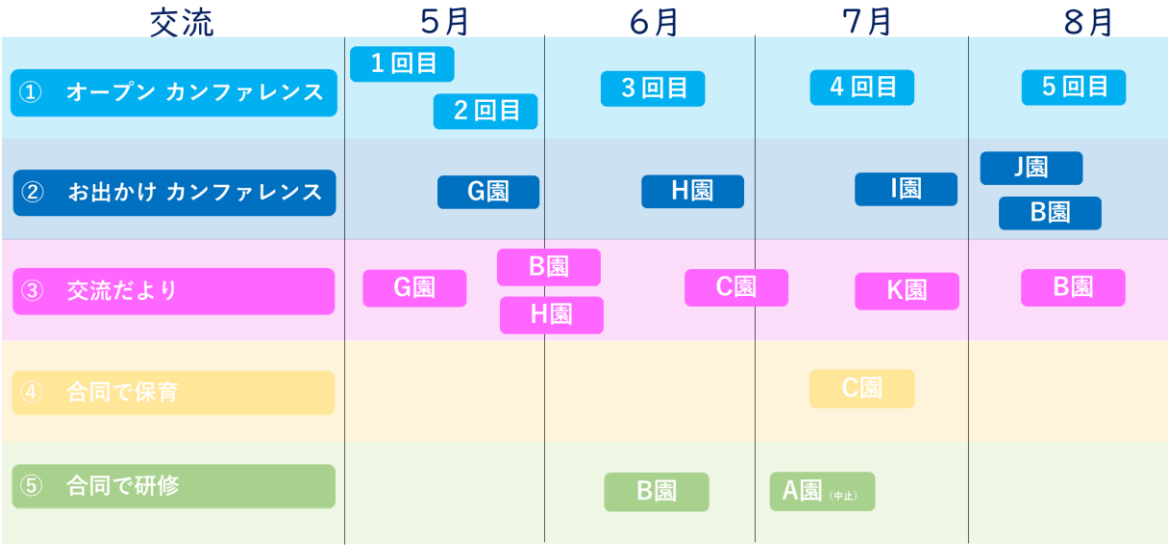
５　研究の実際

（１）交流の継続的な実践と検討

①　交流の実際

まずは、今年度の交流を実施していくにあたり、交流において大切にしたい心構えとして「園と園とで一緒に交流を考え、つくっていく」ことを、全職員で共有した。

２年次に実際に行った交流の全体像は、（図１）の通りである。以下、それぞれの交流の検討プロセス、交流の実際、交流が子どもの育ちを支えた事例、実践と検討を行った本園職員の実感について述べていく。



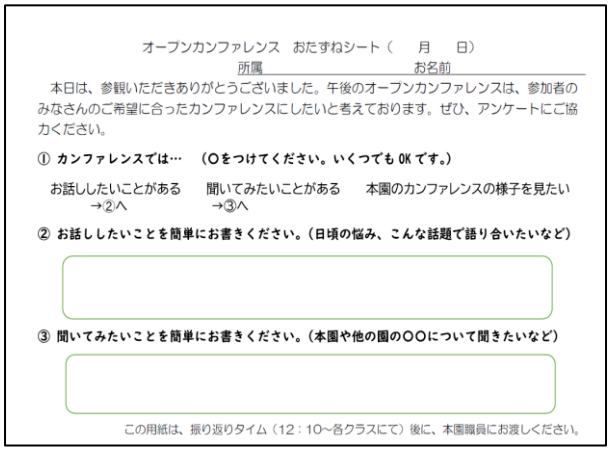
※Ｒ５協力園　Ａ園　Ｂ園　Ｃ園　　Ｒ６協力園　Ｂ園　Ｋ園　Ｌ園

（図１）２年次に実際に行った交流の全体像

②　オープンカンファレンス

Ⅰ　オープンカンファレンスの検討プロセス

１年次に実施した「公開カンファレンス」の参加者の事後アンケートの見直しを行い、「保育の悩みを本音で語れてよかった」「保育を語る仲間が増えた感じがした」「参加していた他の園の情報が聞けてよかった」「行事についてももっと話が聞きたい」「本園が身近に感じられた」という感想から、今年度のカンファレンスの場をどうつくっていくかを考えた。これらの参加者の声を受け、「公開カンファレンス」を「さらに話しやすい場」に、「さらに情報を得られる場」に更新していこうと考えた。


オープンカンファレンス　おたすねシート（　月　日）
所属　　お名前
本日は、参観いただきありがとうございました。午後のオープンカンファレンスは、参加者のみなさんのご希望に合ったカンファレンスにしたいと考えております。ぜひ、アンケートにご協力ください。
① カンファレンスでは…　（○をつけてください。いくつでも OK です。）
お話ししたいことがある →②へ　聞いてみたいことがある →③へ　本園のカンファレンスの様子を見たい
② お話ししたいことを簡単にお書きください。（日頃の悩み、こんな話題で語り合いたいなど）
③ 聞いてみたいことを簡単にお書きください。（本園や他の園の○○について聞きたいなど）
この用紙は、振り返りタイム（12：10～各クラスにて）後に、本園職員にお渡しください。

（図２）事前アンケート

「さらに話しやすい場」にしたいと考えた背景には、参加者と本音で語り合い、「つながり」を深めたいという願いがあった。本園の保育観や援助に対する考え方に共感してもらうだけではなく、時に批判的な意見や、迷いを赤裸々に語ってもらうことができたら、多様な見方や考え方に出会うことができ、本園の保育のさらなる捉え直しにつながるのではないかと考えた。そのために、参加者の思いや実態を知ることが大切であると考え、事前アンケート（図２）を行うことにした。このアンケートは、参加者が話したいこと、聞きたいことを簡単に記述する形式にな

っている。また、悩みや迷いを気軽に話してほしいという願いを込め、会場にお菓子を置く、話しやすい距離にいすを置く、カンファレンス終了後にフリートークの時間を設定するなど、環境の工夫も試みた（図３）。

（図３）環境の工夫

「さらに情報を得られる場」にしたいと考えた背景には、本園を「ハブ」のようにして、本園と他園、そして他園同士の「つながり」が広がってほしいという願いがあった。そこで、これまでの交流で蓄積してきた「交流だより」をいつでも閲覧できるように環境を設定した。また、他園の行事を更新した軌跡を綴った動画を提供していただいたので、それをいつでも見てもらえるようにした（図４）。

（図４）交流だより・動画が閲覧できる環境

カンファレンスの形式も更新していくことにした。１年次に実施した「公開カンファレンス」では、参加者に本園が評価の取組として行うカンファレンスを参観してもらい、聞いていた感想を語ってもらうという形式で行っていた。２年次は、全員が語り合う仲間として、一緒に参加できるようにしたいと考え、形式を更新した。具体的には、今自分が保育について語りたいことを、一人ずつ語っていき、その中で語られた悩みや共通に出てきた話題を全員で語り合うような形式である。

これらの検討プロセスを経て、より開かれた語り合いにしたいという思いを込めた名前に変更したいと考えた。「公開カンファレンス」を改め、「オープンカンファレンス」と呼ぶことにした。

Ⅱ　オープンカンファレンスの実際

オープンカンファレンスの実際は、（表１）の通りである。オープンカンファレンス（図５）では、最初から話題を設定していたわけではなく、参加者が語る保育の迷いや悩み、その日の公開保育での幼児の姿を語ったことが基になり、語り合いの中で話題がつくられていった。カンファレンスが終わった後に、１５分程度のフリートークの時間を設定すると、その時間に参加者同士の語り合いが始まり、自然とつながりが広がり、深まっていった印象を受けた。

（図５）カンファレンスの様子

（表１）　オープンカンファレンスの実際

実施日 参加者	・話題になったこと　〇感想
５月８日 本園７名 他園８名	・幼保小の接続について。小学校側からの要望にどう対応するとよいのか。 ・主体的な保育を大切にしたいが、一斉保育が間違っていたわけではなく、経験として大事な部分もある。 ・集中して遊び込むこと、話を聞くことが、学習に対する集中力にもつながるのではないか。設定する部分と、自由にする部分とのバランスが難しい。 ・子どもの「やりたい」という気持ちを広げられるような環境構成について知りたい。 ・教師発信であっても、それが子どもの資源や力になっているかどうかが大切だろう。 ・日々の振り返りの中で共通理解を図ることが大切である。 〇理想とする保育の土台として、よりよい保育を考えていけると思った。 〇職員同士で思ったことを出し合い、話合いをしていくことが大事だと思う。
５月 15 日	・「見守ること」は大切だが、言葉の表現の仕方など「人として大事なこと」は伝えたい。そのバランスが難しい。

本園７名 他園６名	・これまでは「こうさせなくては」という思いが強くあったが、子どもたちのことを受け止められるようになってきた。 ・対応に困ったときは、周りの子どもたちが代案を教えてくれることもある。 ・環境構成を整えてから、幼児が遊び始めるまでに時間がかかることもある。遊びに関係あるものを置いておくようにしている。片付けも遊びになる。 ・「ごめんね」とはどういうことなのか、どんな時に使うのかを、みんなで共有するとよいのではないか。 ・切り替えがスムーズにいかず「主体性」を引き出すのは難しい。 ○「附属だからできるのでは…」と思っていたが、実際に参観してみて、自分たちの園でもできるのではないかと思った。
6 月 12 日 本園７名 他園５名	・その日の保育でうれしかったことや、運動会に向けての「ダンス」や「玉入れ」の様子について。 ・片付けの時間がたっぷりとってあり、一人一人に声をかけている。子どもたちの気持ちを聞きながら、気持ちを向けている。そうすると、次の活動への切り替えができるのではないか。 ・職員がいなくても、子どもたち同士で遊べるようにするにはどうしたらよいか。 ・子どもの発想が大人の発想を超えている。子どもたちに聞いてみることも大切。 ・自分が思ったことを伝え、言ったことが叶うという経験を積むことが大切なのではないか。子どもたちの願いと、こちらの考えを擦り合わせていくこと（交渉）が大切だと感じる。 ・遊びが長く続くためにしていることについて。 ○自分ができること、取り入れられることを行い、子どもたちが楽しく過ごせるようにしたい。 ○自分でやってみることで分かることがある。あまり口を出さずに、見守ることの大切さが分かった。
7 月 10 日 本園６名 他園７名	・子どもたちが「泡風呂」をつくりたいと言った。砂場に石けんを入れるのは躊躇したが、どうするとよかったのか。 ・ホースの水を使って、高いところの虫を捕りたい子どもたち。楽しそうだが、人や靴にもかかるため、どう声をかけようか迷った。 ・生活で経験したことが遊びにつながっている実感。 ・高くまでブロックを積みたくて「先生やって」と言われた時、どこまで手伝うとよいのか。 ・なかなか保育室に戻れない幼児に対して、「（保育室に）もっと早く来てくれたらよかったのに」と言うこともあったが、「帰ってきてくれてうれしい」と受け止めるようにした。 ・コンサートを開きたいという子どもの思いを、みんなで支える職員のチームワーク、一人一人に対応する姿が素晴らしい。 ・全員で話題を共有する。みんなが同じ方向を向いていなくてはよい保育はできない。 ○保育士同士の環境は大事で、どうすればよいか悩みながら過ごしていた。附属の先生たちのように、話合いをする中で思いが伝わるとよいと思った。 ○どの場所を見ても、子どもたちがわくわくしている。慌ただしい時間に始まるコンサートをみんなが待っていてる姿を見た。子どもたちが達成感を味わえるように、明日からもっと「待とう」と思った。今何が大事なのかを考えたい。
8 月 6 日 本園３名 他園５名 小学校１名	・判断に困る時の対応について。 ・「この子はこうしたい」という思いに気付き、否定をしないことが大切。 ・大人が「こんなことを？」と思うようなことでも、子どもがやってみたいということを実現できるようにしたい。生活の中にも環境構成をすることが大切。 ・子どもの生活に近い遊びはわくわくする。子どもの気持ちを大切にする活動をしたい。 ・子どもたちが主役である。「なぜ座らない」を「なぜ立っているのか」と捉え、その子なりの理由をそれぞれ考えていきたい。 ・小学校と園とのつながりについて。小学校を見据えると「主体的」というのはなかなか難しい。

	○どんな内容について話すのかどきどきしていた。園長先生、１年目の先生、小学校の先生、小学校から幼稚園に来た先生、いろいろな立場の人たちがこんなに集まる機会はめったにない。お菓子があって心がほぐれた。「この子はどうしてあげるとよいのだろう」と、子どものことを考えながら話す時間は素晴らしい。 ○他の園とこのように話をする機会がなかなかなかった。みんな同じような悩みを抱えていることが分かった。自由保育・自由遊びを広げていこうと職員に話をしたばかりなので、全てまねできるわけではないが、方向性をもって援助していきたい。少しずつでも楽しい保育ができるようにしたい。 ○違った視点からの話をたくさん聞くことができた。子どもたちが興味関心をもつこと、気付きを保育の中でどう取り入れるか参考になった。機会があれば公開保育も参加したい。 ○いろいろな先生方から話が聞けてよい機会だった。子どもたちを否定してしまうと、気持ちを表すことができなくなってしまうため、したいことを保育者が受け止めることが大切だと感じた。 ○「語り合う」ことは大切。一人の考えは限界があるが、語り合うことでみんなが豊かになる。いろいろな方の視点を学んだ。今まで、大人が決めていることが多かったが、少しずつ子どもに任せていきたい。 ○自分の思い通りにさせたくなるのは、時間にゆとりがない時である。子どものありのままを受け止めたい。もう一度落ち着いて考えよう、自分の目や心をもう一度リセットしようと思った。

オープンカンファレンスは、５月から９月までに５回実施し、計３２名の参加があった。実施日や内容については、（図６）のようなチラシを作成し、市内外の園に広報を行った。

（図６）カンファレンスへの参加を呼びかけるチラシ

Ⅲ　オープンカンファレンスによる「つながり」が子どもを支えた事例

オープンカンファレンスを「より話しやすい場」「より情報を得られる場」へと更新していったことが、本園の保育にどうつながっているのかを、幼児の姿とそれを支える教師の姿から、エピソード事例として紡いでいくことで捉えていきたいと考えた。以下にそのエピソード事例を示す。

【３歳クラスの事例】

４月、３歳クラスでは、帰りの集まりの時には、幼児の机を保育室に並べ、いすに座って担任の話を聞けるように環境構成をしている。５月になると、例年、机といすを出さないようにし、床に座るようにしていた。３歳クラス担任は、５月になったので、例年通り、帰りの集まりの時には、机を出さないようにし、床に座って担任の話を聞けるようにしようとした。しかし、机やいすをなくすと、A児がなかなか落ち着かなくなり、どうすればよいか悩んでいた。３歳クラスの担任は、５月８日のオープンカンファレンスの際に他園の先生に、この悩みを打ち明けてみることにした。すると、「子どもが違うのだから、例年と違うかたちでもよいのでは」と意見をもらった。３歳クラス担任は、例年通りの子どもの育ちばかりを思い描いていた自分の姿を自覚し、目の前の子どもの今の育ちにもっと目を向けようと、捉え直した。

そこで、A児が落ち着いて過ごせる姿を思い描きながら、翌日の帰りの集まりから、４月と同じかたちに戻し、机を出してみることにした。すると、保育室を走っていたA児が、自分の席に座って担任の読み聞かせを待っている姿があった。A児にとって机があることは、今何をするのかが視覚的に分かりやすく、安心して過ごすことにつながっているのではないかと捉えた。A児だけではなく、他の幼児も落ち着いて過ごす姿にもつながった。

３歳クラス担任は、オープンカンファレンスがより他園の先生方と話しやすい場になったことが、さらなる保育の捉え直しにつながったのではないかと考えた。今後も、前例にはとらわれず、目の前の子どもの姿を大切にした保育をしていこうと捉え直した。

【５歳クラスの事例】

５歳クラス担任は、４月から、子どもたちの遊びや、今の楽しみに合わせて、毎週２０冊、図書館で借りた本を本棚に並べ、環境構成を行っていた。５月、「土の色ってどんな色」という本を手に取った５歳クラスの B 児は、「幼稚園の土を全種類集めたい」という思いをもった。B 児は、ふるいを使って目の細かい土をつくり、それをセクションケースの中に土の種類ごとに収めていった。B 児は１週間以上、毎日のように園庭を駆け巡り、土集めをしていた。

ある雨の日、新たな土を求めて園庭を歩いていると、粘土質の土がぬかるんでいることに気が付いた。B 児はそれを手に取り、「いいこと考えた、これで粘土がつくれるかもしれない」と言って、手でこね始めた。それがきっかけとなって、粘土質の土でお皿やマスコットをつくる遊びが始まった。B 児は、水と土のちょうどよい塩梅の配合を試行錯誤しながら、２週間くらいの時間をかけてお皿を完成させた。すると、B 児と一緒にお皿をつくっていた C 児が、「これ焼きたい」と話した。B 児は「それいいね！」と言って、今度は土でつくったお皿を焼く「かまどづくり」をはじめようとした。５歳クラス担任は、かまどをつくることなんて、想定もしていなかったので一瞬戸惑ったが、もしかしたら B 児は本当に焼き物を焼けるかまどをつくるのではないかと、B 児たちをわくわくする気持ちで見守ることにした。

B 児は１週間かけて友達と一緒に園庭の隅にあったレンガを積んでいき、バーベキュー遊びに使う金網を上に敷いて、かまどを完成させた。そして、安全にかまどに火をつけるまでに１週間かけて準備を行った。B 児はかまどでお皿を焼くことを、ついに実現した。焼いて真っ黒に焦げたお皿を嬉しそうに抱え、母親に笑顔で見せていた姿は、今でも鮮明に思い出せるほど輝いていた。

５歳クラス担任は、この B 児の姿をオープンカンファレンスで語った。他園の先生方に語ることによって、身近にある土という材の奥深さや可能性、そして、自分自身が「想定外」を楽しみながら遊びを一緒につくっていくことの大切さを自覚した。

後日、カンファレンスに参加した他園の先生方から感想が寄せられた。「早速、園庭の土を掘り始めました。私たち保育士も子どもも今土集めに夢中です」「環境が整った附属幼稚園だからできることだと思っていましたが、どの園にも土はあるから、近々私もやってみたいと思いました」と保育の中で実践したことや、明日の保育が楽しみになったことを聞くことができた。

オープンカンファレンスは、５歳クラス担任にとって、自分のしてきた保育の意味や価値を自覚することができるような場となった。また、他園の先生方にとっては、土の遊びに対する新たな見方や考え方を得る場として機能したのではないかと捉えた。５歳クラス担任は、自分のしてきた保育を、子どものストーリーから語り、「実感を伴う言葉」として発信していくことは、ハブのような役割を担う園にとって、大切なことではないかと捉えた。

Ⅳ　オープンカンファレンスの継続的な実践と検討を行った、本園職員の実感

３歳クラス担任は、エピソード事例を記録していく過程で、「オープンカンファレンスで他園の先生方に日頃の悩みを話すことができ、アドバイスをいただけたのはありがたかった」と振り返った。大切なのは、前例にはとらわれず、目の前の子どもの実態、思いや願いを読み取って支えていくことであると思いを新たにし、自分の保育に自信をもつことにもつながったのではないかと自覚した。また、「名刺交換している方もいて、先生方同士もつながっていくよい雰囲気を感じた」「参加された先生方が和やかにお話してくださっていてうれしかった」と、カンファレンスの雰囲気がよかったのではないかと振り返った。そのような雰囲気であったからこそ、自分の悩みや迷いを語れたのではないかと考えた。

５歳クラス担任は、事例を記録していく過程で、カンファレンスという場が、自分の保育を捉え直していく場として機能していることに改めて気付いた。保育者が悩み、迷った過程も含めて、子どもの姿を基に、実感の伴う言葉で語っていくことの大切さを実感した。また、保育は待ったなしの営みであり、迷いや悩みはつきものであると捉えている。同じように悩みや迷いを抱えている「仲間」が集まり、互いに学び合って明日の保育が楽しくなるような、安心感や期待感をもてる場になっているのではないかと考えた。

５回のオープンカンファレンスを終えた後、本園職員で８月までのカンファレンスについて改めて振り返ってみた。昨年度のカンファレンスと比較して、参加者が本音で語り合う姿が見られたのではないかと共有した。これまでに、「附属園だからできることなのではないか」という意見をもらうことがあり、本園と他園でどこか距離が遠い存在であると感じることが少なからずあった。しかし、オープンカンファレンスでは、悩みを赤裸々に語る姿、疑問に思ったことを本音で語る姿も見られるようになり、一緒に保育を考える「仲間」が増えたような実感があった。カンファレンスの最初の自己紹介の時に、「〇〇園の先生に勧められて参加しました」と、参加したきっかけを語る参加者の姿から、本園での語り合いが広まっているのではないかという実感もあった。

また、オープンカンファレンスの前日に「明日行ってもいいですか」という連絡をもらうことがあった。また、当日に「急ですが都合がついたので来ました」という参加者もいた。これは、オープンカンファレンスが誰もが気軽に参加できる場になってきている証ではないかと捉えている。カンファレンスの情報が共有できるようなツールを検討したり、気軽に来られるような園の体制を整えたりすることで、さらに継続的で持続可能な「つながり」をつくっていくことになるのではないかと考える。また、カンファレンスに来た参加者と気軽につながり続けられるような工夫がないか、さらに探っていきたい。

本園の職員が、自分がした援助は本当によかったのかという悩みをオープンカンファレンスで語ると、他園の職員がそれに対して意味付けや助言を行う場面も少なくなかった。これにより、自信をもって明日の保育に臨むことができたのではないかと実感した。そして、自分のしてきた保育を、子どものストーリーとして紡ぎ、実感を伴う言葉として語ることは、ハブのような役割を担う園にとって、大切なことではないかと捉えた。

③　お出かけカンファレンス

Ⅰ　お出かけカンファレンスの検討プロセス

１年次に実施した「公開カンファレンス」の感想の記述の中に、「次はうちの園の子どもたちを見に来てもらいたい」「カンファレンスに参加したいけど、なかなか園を空けられない」という要望や意見が多かった。そこで、本園の職員が他園に出向くことで、さらに多くの先生方と語り合うことができ、「つながり」が広がり、深まるのではないかと考えた。本園職員を気軽に呼んでカンファレンスをしてほしいという願いを込めて、他園に出向いて行うカンファレンスを「お出かけカ

ンファレンス」と呼ぶことにし、新たな取り組みとして実施することとした。

また、お出かけ先の園の保育や、その背景にある文化を少しでも理解したいという思いがあった。そのため、お出かけカンファレンスの当日は、午前中に保育を参観し、午後のカンファレンスの時に、午前中の保育や、そこで捉えた幼児の姿を話題の一つにしていくような形式を基本とし、日程調整や準備を行っていくこととした。

Ⅱ　お出かけカンファレンスの実際

「お出かけカンファレンス」の実際は、（表２）の通りである。また、お出かけカンファレンスは、（図６）のチラシを活用し、実施を市内外の園に知らせた。お出かけカンファレンスの申し込みがあった際には、お出かけ先の園にどのような願いがあり申し込みをしたのか、そのきっかけを聞くようにしてきた。その願いに合わせて、本園の保育実践を紹介する、カンファレンスの話題を設定するなど、カンファレンスの進め方を考えてきた。午前中に捉えた保育の様子を、撮影した写真を使って、カンファレンスの際に簡単なプレゼンテーションとして示し、お出かけ先の園の保育のよさや魅力について共有してきた。

（図７）リモートで行った
お出かけカンファレンス

また、お出かけ先が遠方の場合は、お出かけ先の園に行く職員と、本園に残ってリモート参加する職員とで分かれ、職員全員でカンファレンスに参加できるようにした（図７）。

（表２）お出かけカンファレンスの実際

実施日 参加人数	他園からの願いや依頼　／　本園が取り組んだこと／ カンファレンスの様子　／　その後の感想
5 月 29 日 本園６名 Ｇ園７名	〈他園からの願いや依頼〉 附属幼稚園のような保育の振り返りがしたい。 〈願いを受けて、本園が取り組んだこと〉 午前中、本園職員１名が保育の参観に出向き、参観した際の子どもの姿を写真で撮影した。その写真をもとに、子どもの姿や育ち、保育者の援助についての気付きをプレゼンテーション資料にまとめた。 〈カンファレンスの様子〉 本園職員が作成したプレゼンテーション資料を使いながら、カンファレンス参加者全体に共有した。それを皮切りに、Ｇ園の職員がその日の保育の様子や普段の保育での悩みや迷いについて一人ずつ語った。 ・環境構成をどうしていくかについて ・気になる子どもをどう支えていくかについて ・５月の初旬に送付した交流だよりについて 〈その後の感想〉 Ｇ園の４歳クラス担任は、「交流だよりを読んでから、幼児の発見や感動を共有していくことが楽しくなった」と語った。また、Ｇ園５歳クラス担任からは、６月のオープンカンファレンスに参加したときに次のような感想をいただいた。「お出かけカンファレンスの時に話題になった『遊びをくらし全体で捉えていく』という言葉が印象に残っている。遊びで盛り上がったものにかかわる絵本を読み聞かせたり、帰りに話題にしたりしたら、遊びがさらに盛り上がりました。」
6 月 26 日 本園８名 ※対面２名	〈他園からの願いや依頼〉 園の立ち上げに際して、子ども主体の保育について学びたい。附属幼稚園での遊びの様子を紹介してほしい。

オンライン 6名 H園10名	〈願いを受けて、本園が取り組んだこと〉 午前中、本園職員１名が保育の参観に出向き、参観した際の子どもの姿を写真で撮影した。その写真をもとに、子どもの姿や育ち、保育者の援助についての気付きを語れるように準備した。また、事前に本園の遊びの様子が分かるような写真を各クラスごとに準備し、遊びのエピソードを紹介できるようにした。後日、「交流だより」を作成し、H園に送付した。 〈カンファレンスの様子〉 本園での遊びの様子を各クラス担任が紹介した後、その日のH園の保育を参観した職員が、参観での気付きを写真を見ながら話をした。カンファレンスでは、日頃の先生方の悩みや迷いが語られ、それについて話し合った。 ・遊びの中で子どもの姿を見守るべきか、声をかけるべきか迷う場面がよくある。そのバランスについて。 ・製作活動の際、できない幼児への言葉かけや援助について ・水に濡れて、ペンが使えなくなる経験を今後にどうつなげていくかについて ・子ども主体と考えたときに、どんなところに気をつけて言葉をかけていくかについて 〈その後の感想〉 職員の子どもの見方が変わってきた。保育所保育指針を開いて、保育について考える職員が増えてきた。
7月17日 本園３名 Ｉ園４名	〈他園からの願いや依頼〉 保育の評価のしかたを学びたい。子ども主体の保育を一緒に考えてほしい。 〈願いを受けて、本園が取り組んだこと〉 本園職員３名が保育の参観に出向き、参観した際の子どもの姿を写真で撮影した。その写真をもとに、子どもの姿や育ち、保育者の援助についての気付きをその場でパワーポイント資料にまとめた。 〈カンファレンスの様子〉 本園職員が参観での気付きをプレゼンテーション資料を使いながら、語った。その後、Ｉ園の先生方から日頃悩んでいることや、困っていることなどが語られ、それについて話し合った。 ・担任と補助の先生との連携について ・一人で対応することが難しい場合について ・異年齢保育をする上での悩みについて ・年長児への憧れにどうもっていくかについて 〈その後の感想〉 Ｉ園からは、「それぞれの先生方の思いを聞く機会になってよかった。今日の話をきっかけに、園としての体制を見直していきたい」と感想をいただいた。また、その後も８月のカンファレンスにＩ園職員が３名参加してくださったり、２回目のお出かけカンファレンスの申し込みをいただいたり、継続的な交流が続いている。
8月1日 本園５名 Ｊ園10名	〈他園からの願いや依頼〉 園での遊びの環境を問い直したい。 〈願いを受けて、本園が取り組んだこと〉 本園職員５名が保育の参観に出向き、参観した際の子どもの姿を写真で撮影した。その写真をもとに、子どもの姿や育ち、保育者の援助についての気付きをプレゼンテーション資料にまとめた。

	〈カンファレンスの様子〉 その日の保育について、本園職員３名がそれぞれ参観での気付きをパワーポイント資料をもとに語った。その後、Ｊ園の先生方がその日の保育や普段考えていることについて一人ずつ話をした。 ・やっぱり「遊びが大事」ということに気付いた ・幼児のやりたい思いがちがっているとき、どのように援助していけばよいのか ・安全面が優先されすぎて、そのことばかりに目が向いてしまう ・生活が中心になっていることに気付いた ・「年長だから…」という思いが強く、子どもの声を聞いていなかったのかなと考えた 〈その後の感想〉 お出かけカンファレンス後、次のような内容のメールをいただいた。「この日のカンファレンスで、みんなで同じ方向を向けた気がする。みんなで保育を話し合うことも初めてで、語り合う中で、他の先生の悩みを聞いたり、課題が見えたりしたのもこのカンファレンスのおかげ。自分の保育に自信がもてずにいたが、この日のカンファレンスで肯定されたことで安心した職員がいた。子どもの遊びの捉え方、附属の職員の思いを聞くことができて、勉強になった。上越市全園がお出かけカンファレンスするべきです！」
8 月 2 日 本園５名 Ｂ園 13 名	〈他園からの願いや依頼〉 普段なかなか研修に行けない職員の学びの機会をつくりたい。 〈願いを受けて、本園が取り組んだこと〉 本園職員５名が保育の参観に出向き、参観した際の子どもの姿を写真で撮影した。その写真をもとに、子どもの姿や育ち、保育者の援助についての気付きをプレゼンテーション資料にまとめた。 〈カンファレンスの様子〉 その日の保育について、参観した本園職員５名が参観での気付きをプレゼンテーション資料をもとに語った。その後、２つのグループに分かれてカンファレンスを行った。 ・幼児が自分の思いを表現するためにどのように援助していくのがよいのかについて ・職員の連携について ・子どもと同じ目線で楽しむことを大事にしていることについて 〈その後の感想〉 お出かけカンファレンス後、次のような内容のメールをいただいた。「数時間の参観だったが、自分の園の遊びの一コマを見ることで『こんなことあるな』と共有できた。声を出し、はつらつと研修できた。『プール遊び』の中でもいろいろな気付きがあり、それを伝えてくれたのはとても勉強になった。研修の後、『楽しかった』『モチベーションが上がった』等、１時間ちょっとのカンファレンスとは思えないほど、職員の気持ちが揺り動かされた内容だった。」

Ⅲ　お出かけカンファレンスによる「つながり」が子どもを支えた事例

お出かけ先の幼児の姿を読み取り、それを基にして語り合うことが、本園の保育の捉え直しだけでなく、お出かけ先の園の保育の捉え直しにまでつなげることができれば、お出かけカンファレンスを実施する意味や価値をより感じられるのではないかと考えた。お出かけ先の園と本園の両方の園の保育の捉え直しにつながった事例を以下に示す。

【３歳クラスの事例】
お出かけカンファレンスでＨ園を参観した際、４歳クラスのＤ児はビニールテープでカップをくっつけたいという思いをもっていた。Ｄ児は、「これで、くっつけたいんだよ。先生、やって」と参観者である本園３歳クラス担任に頼みに来た。「私はどうやったらいいか、分からないんだ」と伝え、しばらくやりとりをしていると、Ｄ児の目の前で他の幼児がビニールテープを自分で切って使い始めた。そして、ビニールテープを使い終わると、それをテーブルに置いた。本園３歳クラス担任は、ビニールテープの先が芯から離れている状態でテーブルに置かれていることに気付き、Ｄ児に伝わるように、「あっ」と言ってそのビニールテープを指さした。Ｄ児はそれに気付き、そのビニールテープを手に取ると、うれしそうに自分でハサミを持ってきて、ビニールテープを切って、貼り付けた。次に、もう１枚貼り付けようとしたとき、テープの先が芯にぴったりと張り付いていた。しかし、Ｄ児は、自分でテープをじっくり見て、手で触り、テープの先を探しているようだった。ついさっきまで「先生、やって」と言っていたＤ児だったが、自分で切った経験が自信になったのか、今度は自分でテープの先を探し、自分で切って、貼り付けていた。その時のＤ児は「できた！」ととてもうれしそうだった。 このＤ児の姿を午後のカンファレンスでＨ園の先生方や本園職員と共有した。その中で、やはり「子どもは自分で育つ力をもつ存在」であり、その力を信じることが大切だということが話題になった。このような自分でがんばる姿は、Ｈ園の先生方の日々の積み重ねがあったからだと感じ、これまで保育者が、幼児の実態に合わせて見守りながら、「少しがんばれば自分の力でできる」という経験を積み重ねてきたからではないかと捉えた。 このお出かけカンファレンスでは、幼児が「自分でがんばる姿」を見ることができた。その姿は、「少しがんばったら自分でできた」という経験の積み重ねによるものだと捉えた本園３歳クラス担任は、自分も保育の中でそんな瞬間を見逃さないようにしていこうと気持ちを新たにした。そんなある日、３歳クラスのＥ児が「捕まえたバッタを紙コップに入れたい」という思いをもち、紙コップに入れた場面があった。バッタを紙コップに入れるが、バッタが跳ねて紙コップから飛び出していく。それを見ていたＦ児は「ふたをすればいいんだよ」と提案する。Ｆ児はさらに「テープがあれば、ふたができるよ」と言った。これまで３歳クラスでは、遊びの時間に紙コップやセロハンテープを提供したことはなかったが、この経験が「自分でがんばる姿」につながるのではないかと考え、提供することにした。二人は、これまであまりセロハンテープを使った経験がなかったためか、なかなかうまくいかない。３歳クラス担任はそれを見て、手を貸したくなりながらも、「自分でがんばる姿」を大切にしたいと考え、「すごいね。もうすこしだね」などとそのがんばりを称賛する声かけを続けた。すると、「こうしたらいいんじゃない？」などと自分たちでかかわりながら、ふたをつくる姿につながった。長い時間、黙々とつくり続けた二人は、「やった！できた！」とうれしそうに紙コップを見せてくれた。その日、Ｆ児は遊びの時間中、ずっとその紙コップを持ちながら遊んでいた。そして、帰りには迎えに来た母親にその紙コップを自慢げに見せ、「これ、自分でつくったんだよ」と伝えた。３歳クラスでは、例年虫かごを用意していない。今回のように、「自分で捕まえた大切な虫を逃げないように入れ物に入れたい」という思いから、工夫する姿につなげたいという意図があったのだと、この出来事から改めて感じた。そして教師がその瞬間を見逃さず、少しのきっかけをつくることで、「自分でがんばる姿」につながるのだと改めて実感することができた。

Ⅳ　お出かけカンファレンスの継続的な実践と検討を行った、本園職員の実感

今年度、本園での勤務１年目の４歳クラス担任は、お出かけカンファレンスの後、「自身の子どもたちの見方や捉え方はよいのか」と迷いを語った。これは、３歳クラス担任、５歳クラス担任も同じであった。違う文化をもつ他園の保育をどう見て、どう語るのか、迷いの中で取り組んできたことを振り返った。しかしながら、繰り返し「お出かけ」をしていく中で、３歳クラス担任は、「まだまだではあるが…子どものみる目、保育をみる目が耕されてきた感じがする」と、自身の変

容を自覚した。これは４・５歳クラス担任も同様である。お出かけカンファレンスを振り返ると、迷いながらも、多様な園の幼児を捉えてきたことによって、幼児を読み取る目が耕されているのではないかという実感があった。お出かけ先の園とは、交流が続いている。そのため、お出かけ先で捉えた子どもの、その後の育ちを聞くことも、本園職員の楽しみの一つになっていることを実感している。

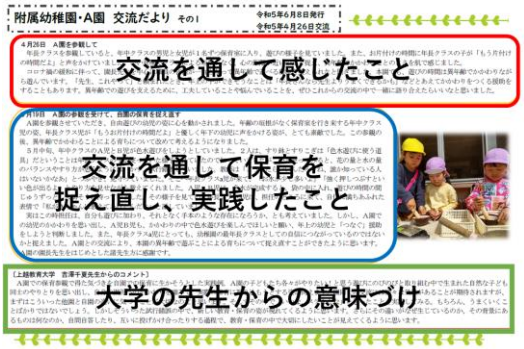
また、３歳クラス担任は、「カンファレンスの後半、他園の先生が『明日からまたがんばろう』と保育に前向きになる様子が見られてうれしかった」と振り返った。お出かけ先の先生方の前向きさにもつながっていることから、「つながり」の広がりや深まりを実感した。

今後、お出かけカンファレンスを行うことが、本園の保育の捉え直しにどのようにつながったのかについて、さらに検討していく必要性を感じている。また、お出かけカンファレンスを持続可能なものにしていくために、主に夏季休業日に設定するなど、本園の保育時間になるべく重ならないような時期を検討していきたいと考える。

④交流だより

Ⅰ　交流だよりの検討プロセス

交流だよりは、（図８）のように「交流を通して感じたこと」「交流を通して保育を捉え直し、本園で実践したこと」「大学の先生からの意味付け」を書いて、交流した園とやり取りをするツールとして活用してきた。また、交流だよりを送付した園には、コメントや感想を依頼し、次の交流につなげてきた。１年次には、14枚の交流だよりを書き、蓄積してきた。２年次では、園内外の誰もがすぐに手に取れる環境を整えるなど、交流の情報を共有、発信していくツールとしても活用していけるようにしようと検討した。



（図８）交流だより

Ⅱ　交流だよりの実際

オープンカンファレンスを行う会場に、交流だよりを並べておき、休憩時間や移動時間に誰もが手に取って見られるように環境を構成した。会場では多くの参加者が手に取り、閲覧している様子が見られた。２年次は、４月から９月までに計６枚の交流だよりを書き、やりとりを行った。また、本園職員も、交流だよりを閲覧可能なかたちに整えていく過程で、全ての交流だよりの読み直しを行い、どのように保育を捉え直してきたのか、大学の先生がどのように本園の保育を意味付けてきたのかを振り返った。

Ⅲ　交流だよりによる「つながり」が子どもを支えた事例

交流だよりを他園とやり取りするツール、情報を共有するツールとして活用してきたことが、本園の保育にどうつながっているのかを、幼児の姿とそれを支える教師の姿から、エピソード事例として紡いでいくことで捉えていきたいと考えた。以下にそのエピソード事例を示す。

【３歳クラスの事例】
６月のある日、３歳クラスＧ児は、遊びの時にかぶっていた自分の帽子を水の入ったバケツの中に入れていた。そして、その帽子をうれしそうに手に取り、アスファルトの地面にたたきつけるように投げた。Ｇ児は笑いながら、投げて拾うことを繰り返していた。 この姿を見た３歳クラスの担任は、昨年度Ｂ園と合同研修をした職員が、その時の気付きを書いた「交流だより」が頭に浮んだ。これまで遊びと捉えていなかった洗濯を遊びと捉えるように

なったこと、大人が止めたくなるようなことでもその子が本当にしたいことは何なのかを読み取ることの大切さが書かれていたことを思い出したのである。３歳クラス担任は、G児が帽子を投げているとき、一瞬止めようかということも頭をよぎった。しかし、水を含んだ帽子の重さやそれを投げた時のバシャっという音、そして、その感触が今のG児の楽しみなのではないかと読み取り、「おもしろいことやってるねー」と言いながら、一緒にその様子を楽しむことにした。

しばらく繰り返すうちに、帽子は土の上に落ち、たくさんの砂が付いた。G児は、その帽子をバケツの中に入れた。G児はすぐにバケツから帽子を持ち上げると、「きれいになった！」と嬉しそうに３歳クラス担任に伝えた。その後も、G児は、帽子に砂をつけてはバケツできれいにし、また土の上に投げて、繰り返し楽しんでいた。３歳クラス担任は、もし、G児が明日もこの遊びを続けたとき、さらに夢中になれるように、環境構成として汚れの分かりやすい白い布巾を水盤の近くに置いておくこと、必要に応じて物干しを出せるようにしておくことにした。翌日からG児は、洗濯物を物干しに干したり、自分の服を洗濯したりして遊びを存分に楽しんでいた。G児の洗濯遊びは２週間にわたって続いた。G児を見守り、支えてきた３歳クラス担任は、「何におもしろさを見出しているのかを読み取り続け、環境構成をし続けていくことの大切さ」「子どもと一緒に心を動かし、遊びを楽しむ存在であることの大切さ」を改めて実感した。

３歳クラス担任は、交流だよりによって、交流での気付きを園内でも共有できたからこそ、G児のことを肯定的に読み取れたのではないかと考えた。１年次からの継続した「つながり」の中で、自身の保育を捉え直していることを自覚した。

【５歳クラスの事例】

４月、５歳クラス担任は、片付けの時間の最後の見回り「うみ組パトロール」を通して、５歳クラス児が幼稚園のリーダーのようになってほしいと願っていた。しかし、どうしたらリーダーとしての自覚につながるのか、試行錯誤していた。

同じタイミングで、５歳クラス担任は、５月末にお出かけカンファレンスに行く予定のG園の参観に行った。G園の５歳クラス児は、友達と会話をしながら夢中になって料理づくりをしていた。G園の５歳クラス担当の職員は、料理を食べるお客になり、幼児の感動を共有していた。片付けの時間になると、料理づくりをしていた幼児は、料理が入ったボウルを４人で持ち、「わっしょいわっしょい」と言いながら、まるでおみこしを運ぶかのように、生き生きと片付けをしていた。その姿は、幼稚園のリーダーとしての自覚が芽生えている姿なのではないかと読み取った。

本園に戻った５歳クラス担任は、交流だよりを書きながら、幼稚園のリーダーのようになってほしいという思いが先行し過ぎて、焦っている自分の姿を自覚した。G園の５歳クラス児のように、遊びが充実することが、幼稚園のリーダーとしての頑張りにつながるのではないかと考え、その方向性を副担任と確認した。

５歳クラスH児は、片付けの時間になっても「うみ組パトロール」には目が向かない日が続いていた。５歳クラス担任は、G園での気付きを思い出し、H児の遊びは本当に充実しているのかを、まず読み取っていくことにした。ある日、H児は、テラスで料理づくりをしていた。H児は、肉に見立てた赤土をちょうどよい固さになるまで、何度も練り直し、肉ができると、今度は、バーベキューの網の上に油に見立てたボトルの水をかけた。肉を網の上に置き、しゃもじで優しく裏返し、水のボトルを「たれ」に見立て、肉にかけていた。その後、肉を葉っぱにくるみ、「ハンバーガー」を完成させた。５歳クラス担任は、H児が料理の工程にこれほどまでにこだわって料理をしていたことを初めて知り、心が動いた。H児は５歳クラス担任に輝くような表情で、このハンバーガーをくれた。５歳クラス担任は、H児に感動を伝えた後、H児の遊びの充実を願って、もらった「ハンバーガー」を手に持ちながら園庭を歩くことにした。

すると、４歳クラス副担任が、この「ハンバーガー」を見て同じように心を動かし、H児のところへ行った。そこには、他の幼児もたくさん集まってきた。このときのH児の表情は、自信に満ち溢れていた。５歳クラス副担任も同じように心を動かし、H児との会話の中でお店屋さんにしたいという思いを読み取り、お店の看板づくりを支えた。この時もやはり、H児は自信に満ちた表情だった。

H児の土を使った料理づくりは１週間続いた。５月、ある日の片付けの時間、H児は「Ｉちゃん、もう片付けてパトロール行こう。だって、うちら、うみ組なんだから」とH児に話していた。この言葉を聞

いたとき、５歳クラス担任は、H児の遊びが充実し、多くの先生や友達に認めてもらったことが、もしかしたら幼稚園のリーダーとして頑張りたいという思いを高めたのではないかと捉えました。その後、H児はつくった料理をふるまうレストランを開いた。年下の幼児がお客さんとして来たときにも、優しく接する姿からも、自信を高めている様子がうかがえた。G 園との交流だよりのやりとりを通して、多様な見方や考え方に出会い、保育を捉え直していくことにつながった。

Ⅳ　交流だよりの継続的な実践と検討を行った、本園職員の実感

３歳クラス担任は、エピソード事例から、「保育中に他園を参観した時のことや交流だよりの内容を思い出すことがある。その瞬間に、他園ではこんなふうに援助していたなと援助のレパートリーが増えたように感じる」と振り返った。事例のように、昨年度の交流だよりに書かれた学びが、今年度の保育に生きる場面があった。交流での学びを言語化し、蓄積していくことの大切さを実感した。５歳クラス担任も、３歳クラス担任と同様に、交流だよりを書きながら、保育において大切なことが自覚されていくような感覚があり、援助のレパートリーを増やしているように実感した。また、４歳クラス担任は、「大学の先生からのコメントは楽しみだった」と振り返った。「大学の先生からの意味付け」を読むことで、保育を捉える視点の広がりを感じている。

情報を共有するツールとして活用するため、２年分の交流だよりを整理した。その過程で、職員で交流だよりの読み直しを行うと、交流だよりの記述内容に変容があることに気付いた。１年次は、絵カードや幼児の作品の掲示の仕方など、目に見えやすい取組について記述されたものが多かったが、２年次は、幼児の今の楽しみを読み取り、意味付けるような記述が多くなっていた。ここから、子どもの姿から、遊びや学びのストーリーを紡いでいくことの大切さを実感した。

交流だよりを交流した園に届けるまでには、学んだことから自分の実践を行い、大学教員にコメントを依頼するといった手続きがあり、やや時間がかかってしまうところが、課題だと感じている。交流だよりの形式を工夫することで、可能な限り早めに交流した園に届くようにするとともに、持続可能なかたちにしていきたいと考える。また、交流だよりを交流した園以外の園の職員にどう読んでもらうか、その情報発信の仕方について、さらに検討の余地がある。HP や SNS 等を活用した発信も視野に入れていきたいと思っている。

⑤合同保育

Ⅰ　合同保育の検討プロセス

１年次は、「同じ幼児の姿を捉えることで保育について考えたい」という願いのもと、一緒に保育をする交流が生まれた。１年次、C 園とは、C 園の５歳クラス児が本園に遊びに来て、本園の園庭で一緒に遊ぶという環境の中で、合同保育を行った。２年次、C 園の職員と話し合う中で、C 園の５歳クラスの幼児の楽しみにつながっていたということを聞き、２年次も継続して合同保育を行うことにした。互いの園の実態に合わせて、可能な時期を選んで合同保育を行おうと共有し、打ち合わせを進めていくことにした。

Ⅱ　合同保育の実際

7 月 11 日、C 園の５歳クラス児 23 名と、職員４名が本園に来園した。本園の５歳クラスの保育室で、遊ぶ時の注意事項などを共有した後、１時間30分程度の遊びの時間を設定し、合同で保育を行った。１年次も同様の合同保育を行っていたため、職員の配置決めや打ち合わせなどは特に行わず、個々の職員が周りの状況を見ながら、遊びの援助を行った（図９）。保育の途中で、迷いが生じたときには、すぐに職員同士で話し合い、情報共有を行っ

（図９）合同保育の様子

た。合同保育を終えた後には、本園職員２名と C 園の職員１名で合同保育の振り返りを行った（表３）。

（表３）C 園職員との合同保育の振り返り

【本園の職員の語り】 ・初めて本園の園庭で遊ぶ C 園の幼児の様子を見ていたら、本園の幼児が掘ったことがないところに穴を掘るなど、本園の幼児が思いつかなかったような遊び方をしていた。本園の幼児の園庭への見方が広がるきっかけが生まれたように思う。 ・本園の幼児と、C 園の幼児が遊びの中で自然とかかわる姿が見られた。 ・土を使った唐揚げづくりは本園では生まれなかった発想だった。
【C 園の職員の語りから】 ・細かな説明や、打ち合わせがなくても、合同保育が実施できてよかった。 ・昨年度の５歳クラス児が経験しているので、その時の話を聞いて、今年度の５歳クラス児も行く前から楽しみにしていた。 ・昨年度、交流の中で廃材を使った遊びをしている姿を目にした。廃材での工作を保育の中に取り入れてみたら、遊びの幅が広がった。

Ⅲ　合同保育による「つながり」が子どもを支えた事例

園と園とで一緒に決めていくスタンスを大切に、合同保育を継続して行ってきたことが、本園の保育にどうつながっているのかを、幼児の姿とそれを支える教師の姿から、エピソード事例として紡いでいくことで捉えていきたいと考えた。以下にそのエピソード事例を示す。

【５歳クラスの事例】
７月の合同保育の時、C 園 J 児は粘土質の土で成形した泥団子の周りに砂をまぶしていた。その近くで、本園K児・L児が粘土質の土を使ってお皿を成形しようとしていた。C 園 J 児と本園K児とL児は言葉を交わすことはなかったが、互いの様子をじっと見ていた。 C 園の職員との振り返りでは、C 園 J 児の遊びが話題になった。５歳クラス担任は C 園の職員と語り合う中で、C 園 J 児は唐揚げをつくりたいという思いをもっていたことを初めて知った。粘土質の土の周りにつけていた砂は、唐揚げの衣であったこともC園職員から聞いた。本園の５歳クラス児は、粘土質の土で型抜き遊びをしたり、お皿をつくろうとしたりすることはあっても、唐揚げをつくるなど、料理に使うことはなかった。５歳クラス担任は、C 園 J 児の姿から、粘土質の土への新たな見方を知った。 ８月のある日、本園K児はお弁当づくりをして遊んでいた。K児は完成したお弁当を担任に見せに来た。中を見ると、粘土質の土に砂をまぶした泥団子が２つ、入っていた。「これは何？」とK児に聞くと、「これはね、唐揚げだよ」とK児が答えた。心が動いた５歳クラス担任は、「おいしそうだね。唐揚げをつくったのはKちゃんが初めてだと思うよ。すごいね」と称賛すると、K児は「いや、違うよ。私、これと同じのを前に誰かがつくっていたの見たよ」と答えた。 この時、５歳クラス担任は、合同保育の時のC園 J 児の姿が頭に浮かんだ。合同保育の時、K児はC園 J 児がしていたことを、きっとよく見ていたのではないかと捉えた。違う文化をもった子どもたち同士がかかわり合う機会があることによって、他園の幼児がしている遊びの魅力を、肌で感じ取ることにつながるのではないかと捉えた。５歳クラス担任は、子どもが直接他園の遊びのよさにふれられることに、合同保育のよさがあるのではないかと考えた。

Ⅳ　合同保育の継続的な実践と検討を行った、本園職員の実感

５歳クラス担任は、事例のように、合同保育をすることによって、本園に粘土質の土を使った新たな遊びの可能性が見えてきた。C 園にも、廃材を使った製作遊びなど、新たな遊びが生まれている。本園では、これを遊びの輸入、輸出と呼んでいる。この遊びの輸出入が子どもを介して行われることに、合同保育の意義を感じた。

また、C 園と主に連絡を取り合っていた３歳クラス担任は、「同じ園と同じ要領で繰り返してきたことで、互いに気兼ねなく合同保育をすることができた」と振り返った。C 園とは２年間合同保育

を継続して行ったことで、２年目である今年度は、細かな打ち合わせ等は一切行わなかった。園の文化は違っても、子どもが主体の保育をしたいと願う気持ちは一緒であることが共有できている証ではないかと実感している。細かな打ち合わせや手続きがなくても、一緒に保育ができることに喜びを感じた。あえて、打ち合わせや手続き等は最小限にするということに、持続可能な交流の在り方が見えてきたように思う。

⑥合同研修

Ⅰ　合同研修の検討プロセス

合同研修は、合同保育と同様に、同じ幼児の姿を捉えることで保育について考えたいという願いのもと、互いの園の実態を踏まえながら実施の方法を検討することにした。１年次に交流だよりをやりとりしていたＡ園とは、持続可能なかたちで「つながり」を深めたいという願いから、２年次には合同研修を２回実施することになった。また、１年次に合同研修を実施したＢ園とは、今年度もＢ園の園内研修に参加するというかたちで継続して合同研修を実施することになった。

Ⅱ　合同研修の実際

４歳クラス担任は、Ｂ園にて保育参観を行い、午後から研修会に参加した。研修会では指導者から、午前中の保育においての子どもの姿、主体性を育む保育のあり方、子どもの読み取りと援助、環境構成などについての指導があった。

この日、Ｂ園の５歳クラスは、生き物捕まえをするために園外へ散歩に出掛けたが、園庭での泥遊びがしたいとの思いをもっていた４名の幼児は園に残り、他クラスの先生が保育することになった。「残る子どもたちをお願いします！」「いいよ！」と互いに言い合えることは、職員がチームで動いているからこそである。この日、散歩に出掛けた５歳クラスが戻ってくると、園庭にいた職員も子どもたちも「お帰り！」「どうだった？何かいた？」と温かく迎えており、Ｂ園の先生方全員で、この園の子どもたちを保育しているように感じた。「先生たちが楽しいことは、子どもたちが楽しいことにつながる」「先生たちの仲がよいことは、子どもたちの仲がよいことにつながる」との言葉に、４歳クラス担任は「職員の方々と一緒に楽しみながら保育をしたい」と自身の保育を振り返る機会となった。

また、他の子と比べてできないところを見たり、苦手を責めたりするのではなく援助を丁寧に行うこと、子どもをまるごと受け止めることなど、保育に大切なことについての話を受け、４歳クラス担任は「これまで目先のことばかり気になってしまうことが多かったが、一人一人のことをしっかり読み取り、その子の育ちを捉えよう」と気持ちを新たにした。

Ⅲ　合同研修による「つながり」が子どもの育ちを支えた事例

「園と園とで一緒に決めていく」心構えを大切に、合同研修を継続して行ってきたことが、本園の保育にどうつながっているのかを、幼児の姿とそれを支える教師の姿から、エピソード事例として紡いでいくことで捉えていきたいと考えた。以下にそのエピソード事例を示す。

【４歳クラスの事例】
４歳クラス担任は、幼稚園での勤務は今年度が初めてである。子どもをどう支えるのがよいか、毎日のように迷い、悩みながら保育をしていた。６月、４歳クラス担任は、Ｂ園の合同研修に参加した。研修では、「全職員で一人の子どもを支える」ことの大切さが共有された。「先生たちの仲がよいことは、子どもたちの仲がよいことにつながる」という言葉に、大きく心が動き、自園の先生方と一緒にチームで保育をしたい、と思いを新たにした。 研修に参加したタイミングで、４歳クラス担任は「M児をどう支えるか」という悩みを抱えていた。遊びの後、保育室に入ることになかなか思いが向かないM児。M児の思いには寄り添いながらも、どう支えることがM児のくらしを豊かにしていくのか、毎日のように副担任と語り合っていた。４歳クラス担任は、全職員でM児のことを支えることができれば、M児の育ちにつなが

るのではないかと願い、この悩みを他クラスの職員にも話すことにした。４歳クラス担任は、職員での語り合いの中で、「M児が夢中になれる遊びが見つかることが、M児の友達とのかかわりや、自信につながるのではないか」と考えた。そして、M児が保育室に入るような環境構成や言葉がけだけではなく、遊びに夢中になる姿を思い描いて、遊びの援助にも力を注いでいこうと捉え直し、援助の方向性を全職員で共有した。

７月のある日、M児は、コンサートをするために、テラスにいすを並べ始めた。M児は、「満席になったら、コンサートを始めますよ」と話した。しかし、なかなか席が埋まらず、片付けの時間になってしまった。この後はおやつを食べたら、すぐに帰る時間であった。４歳クラスの担任は焦りを隠しながらも、M児の遊びが充実することを願い、その遊びを見守ることにした。

すると、通りがかりにその様子をみた５歳クラスの担任が、コンサートを見に来た。続いて、３歳クラスの担任・副担任と３歳クラスの子が、いすに座った。保育室にいた４歳クラスの副担任がいすに座ると、４歳クラスの子たちも、コンサートを見に来た。満員になると、コンサートが始まり、M児は大勢のお客さんが見守る中、ダンスを１曲踊り切った。４歳クラス担任の目には、M児の何にも代えがたい笑顔が焼き付いた。このとき、４歳クラス担任は、Ｂ園の研修で聞いた「全職員で一人の子どもを支える」という言葉の意味を改めて考えた。打ち合わせなどをしていなくても、全職員がM児の育ちを願い、今この瞬間こそがM児を支えるタイミングだと捉えたことを嬉しく思った。援助の方向性が揃っていることが、こんなにも子どもの育ちにつながるのかと、チームで保育をする喜びを感じ、それを交流だよりに書いてＢ園に送った。その翌日も、M児はコンサートの遊びを続けた。今度は同じクラスの幼児も仲間に入り、一緒にコンサートを楽しんでいた。

４歳クラス担任は、「全職員で一人の子を支えるって、こういうことだったんですね」と、その実感を７月のオープンカンファレンスの時に語った。Ｂ園での研修に参加し、４歳クラス担任は、新たな見方に出会い、研修で耳にした言葉が目の前の子どもの姿から実感を伴う言葉になったことを振り返った。

Ⅳ　合同研修の継続的な実践と検討を行った、本園職員の実感

Ｂ園での合同研修に参加した本園４歳クラス担任は、「Ｂ園４歳クラス担任とは、今年度同じ４歳クラスの担任として、また、互いに園での勤務１年目として、共感できることが多く、また話をしたいと感じた。これからも交流を続けるために、互いの園の様子やそれぞれの思いについて知ることは大切だと思うので、この合同研修がとてもよいきっかけになった」と振り返った。同じ年齢の幼児を担任している職員と、同じ幼児の姿を見ながら語り合うことは、貴重な機会となった。

また、合同研修において、同じ子どもの姿を見て語り合うことのよさを実感した。これまでに他園の職員と語り合うとき、「主体的」などの言葉の捉えも違うことを感じることが少なからずあった。合同研修を行うことによって、それぞれの園で使っている言葉の意味を理解し、共感することにつながったのではないかと実感した。

（２）研究協力園や大学との連携

２年次の初めの頃は、令和５年度研究協力園（３園）のほか、令和６年度研究協力園（３園）と交流をしていきたいと願っていた。しかし、６園とこのような交流をすることは、現実的に難しいのではないかと話し合った。交流するためには、普段の保育を他の職員と交代して行うことが必要だからである。また、令和５年度研究協力園とは、１年間かけてつくってきた「つながり」がある。それを大切にしたいという本園職員の強い思いもあった。２年次は、新たな研究協力園を依頼せずに交流を進めようという意見もあった。このような話合いを経て、令和５年度研究協力園との交流を継続して行っていくことを決めた。

一方で、令和６年度研究協力園とも可能な限り交流を行いたいという思いもあった。そこで、令

和６年度研究協力園には、令和５年度研究協力園との交流に一緒に参加してもらったり、交流についての助言をもらったりすることにより「つながり」をつくっていくことを決めた。２年次に、計６つの研究協力園と本園、研究協力園同士が交流することができれば、「つながり」を広げ、深めていけるのではないかと考えた。

５月、令和６年度研究協力園、大学教員と、本園で今後の交流についての語り合いを行った。「つながり」を広げ深めていく上で、担任を１週間交換留学のようなかたちで交代した交流など、本園の職員だけでは思いつかなかった方法があること、興味のある交流に参加できるような情報共有ができるとよいことなど、多様に意見が交わされた。

これらの意見を受けて、本園が交流を行う情報を、研究協力園と大学とで共有することによって、いつでも興味をもった交流に参加してもらえるようにしたいと考えた。そこで、（図10）のような一覧を作成し、大学や研究協力園にメールで送付し、交流の情報を共有した。

交流の予定

	日にち	曜日	時間	会場	備考
参観	6月11日	火曜日	9:30～11:00	C園	
オープン	6月12日	水曜日	9:00～15:00	附属幼稚園	
研修	6月25日	火曜日	10:00～14:00	B園	
お出かけ	6月26日	水曜日	9:00～15:00	H園	園の立ち上げに際し、子ども主体の保育について学びたい
参観	6月28日	金曜日	9:30～11:30	K園	
研修	7月2日	火曜日	9:15～16:00	A園	
その他	7月8日	月曜日	10:30～11:30	附属幼稚園	大学出前講座「どろだんごづくり」
オープン	7月10日	水曜日	9:00～15:00	附属幼稚園	
合同保育	7月11日（予定）	木曜日	9:50～11:00	附属幼稚園	C園年長クラス来園予定
お出かけ	7月17日	水曜日	13:00～16:30	I園	保育の評価、子ども主体の保育について一緒に考えたい
お出かけ	8月1日	木曜日	9:30～15:00	J園	
オープン	8月6日	火曜日	13:30～15:00	附属幼稚園（上越市）	

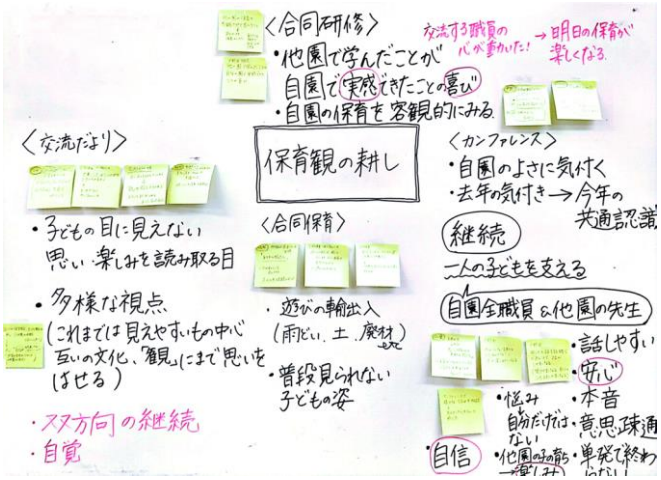
（図 10）研究協力園・大学に送付した交流の一覧

７月 11 日、Ｃ園との合同保育の際、研究協力園であるＬ園の職員と大学教員が、合同保育の様子を参観に本園に来園した。また、本園職員がＫ園と交流だよりをやりとりする際に参観に行くときには、大学教員も同行した。１年次は、本園と他園の１対１の交流が多かった。しかし、2 年次には、１つの交流の場に複数園の職員が集まるような交流が生まれてきた。情報を共有することによって、「つながり」を広げ、深めている実感があった。

６　研究の手応えと今後の展望

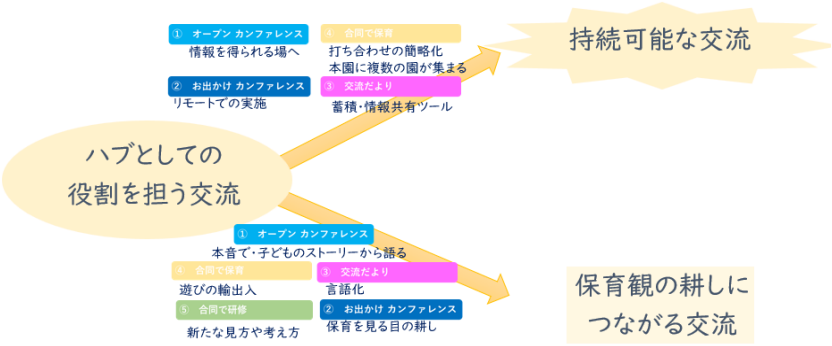
（１）　研究の手応え

「保育観の耕しにつながるような交流」、「つながるよさを実感できる交流」、「ハブのような役割を担う交流」、「持続可能な交流」の実現を思い描き、「オープンカンファレンス、お出かけカンファレンス、交流だより、合同研修、合同保育（以下、５つの交流）」を検討、実践してきた。８月までに行った交流において、本園の職員が感じた手応えを以下に示す（図 11）。



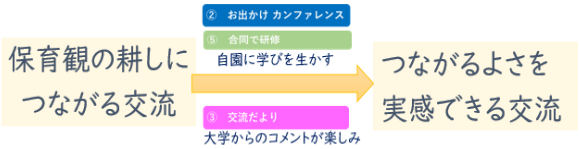
（図 11）本園職員が感じた手応え

まず、「ハブのような役割を担う交流」の実現に向けた取組では、オープンカンファレンスをより情報を得られる場に更新してきたこと、お出かけカンファレンスをリモートで実施したこと、合同保育の打ち合わせが簡略化したこと、交流だよりを情報共有ツールとして使ってきたこと、複数の園が１つの場に集まる交流が増えたことが、「持続可能な交流」につながっているのではないかということが見えてきた。また、オープンカンファレンスで子どもの学びのストーリーを語ることの大切さを自覚したこと、合同保育で遊びの輸出入をしてきたこと、交流だよりで実践を言語化してきたこと、合同研修で新たな見方や考え方に出会ったこと、お出かけカンファレンスで保育を見る目が耕されていることを自覚したことから、「ハブのような役割を担う交流」を目指すことは、「保育観の耕しにつながるような交流」を生み出していくきっかけになるのではないかと捉えた（図 12）。



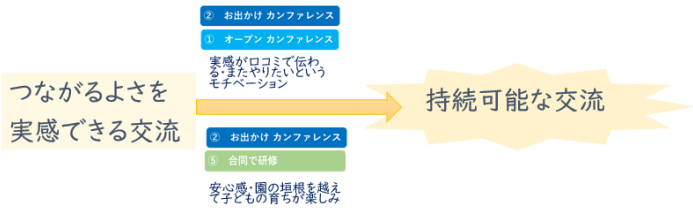
（図 12）ハブとしての役割を担う交流

次に、「保育観の耕しにつながるような交流」の実現に向けた取組では、お出かけカンファレンスや合同研修のように、他園の保育を参観した学びが自園の保育にいきていることを実感したこと、交流だよりにおいて、大学教員からの意味づけによって保育を見る目が耕されるとともに、そのコメントを読むことが楽しみになっていることを自覚したことから、保育観の耕しが、「つながるよさを実感する交流」につながっているのではないかということが見えてきた（図 13）。



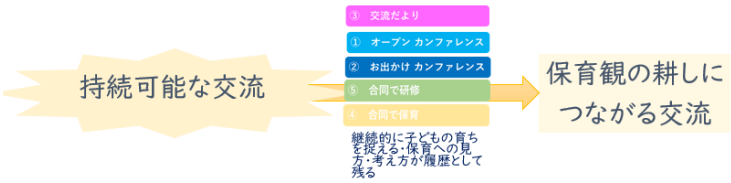
（図 13）保育観の耕しにつながる交流

「つながるよさを実感できる交流」の実現に向けた取組では、合同研修を通して実感した他園で学んだことが自園でいかせたことによる喜び、お出かけカンファレンスを通して感じた悩んでいるのは自分たちだけではないという安心感、そして、園の垣根を越えて幼児の育ちを共有し合う楽しみを、本園の職員も他園の職員も感じることができた。また、本園の交流に携わった他園の先生同士がつながっていったのではないかという実感があった。オープンカンファレンスの参加者からは「他園の先生の勧めで、オープンカンファレンスに参加しました」という声を聞くことができた。「お出かけカンファレンス」への申し込みがあった園からは、「（過去にお出かけカンファレンスを経験した園から）お出かけカンファレンスがとてもよかったと聞いて、申し込みました」といった声を聞くことができた。これらの声は、他園同士で「口コミ」のようにして、本園の情報が共有されているということではないかと捉えている。「つながるよさを実感できる交流」は、他園の先生方が参加してよかった、明日の保育が楽しみになったと実感できるような場を絶えずつくっていくことが大切である。それにより交流へのモチベーションが上がり「持続可能な交流」になっていくのではないかということが見えてきた（図 14）。



（図 14）つながるよさを実感する交流

「持続可能な交流」の実現に向けた取組では、オープンカンファレンスなど、気軽に参加できる交流が少しずつ実現している実感があった。「持続可能な交流」は、継続的に子どもの育ちを捉えてきたこと、そして、保育に対する見方や考え方を広げてきたことを学びの履歴として残していくことによって、より「保育観の耕しにつながるような交流」を実現させていくのではないかと考えた（図 15）。



（図 15）持続可能な交流

これらのことから、園と園の「つながり」を広げ、深めるためには、「継続的、双方向の交流になるように、その場をよりよくつくりかえていく」こと、「継続的に情報を共有していくこと」が大切なのではないかということが見えてきた。交流を継続していく中で、少しずつではあるが、園と園との「つながり」が広がり、深まっている実感があり、つながるしくみが整いつつあるのではないかと捉えている。

（２）今後の展望について

今後は、交流した園からの声にもっと耳を傾けていくことが大切であると考えた。そうすることが、継続的に、双方向に保育の質を高め合うような関係づくりにつながると考えるからである。また、HP・SNS の活用により、園内の共有や交流した園との共有だけにとどまらず、情報をより多くの園に届けていくことができるのではないかと考える。今後、情報の共有の仕方について検討していきたい。

「つながり」をさらに広げ、深めることができた先には、本園が幼児教育・保育のコミュニティのようになっていけるのではないかと思い描いている。継続的、双方向の交流の場をどのようにつくっていくか、交流の情報をどのように共有、発信していくかをさらに検討し、つながるしくみを確かなものにしていきたいと考える。また、園と園のつながりを広げ、深める過程において、さらに広い視野で保育の捉え直しをすることが大切であると考える。そこで、幼小接続を視野に入れた「つながり」もつくっていきたいと考えている。

【引用文献】

こども家庭庁　「幼児期までのこどもの育ちに係る基本的なビジョン（はじめの 100 か月の育ちビジョン）」こども家庭庁　幼児期までのこどもの育ち部会閣議決定　2023 年

文部科学省　「学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について～幼保小の協働による架け橋期の教育の充実～」中央教育審議会初等中等教育分科会　幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会　2023 年

附属幼稚園・B園　交流だより　その4

令和6年6月24日発行
令和6年5月16日交流

5月16日　B園を参観して

B園を訪問し、園長先生から園舎を案内していただき、園庭での遊びの様子を参観させていただきました。園舎に入り、ぱっと目に入ったのは、幼児たちが制作したこいのぼりでした。大きなこいのぼりが４つ、上から吊るされていて、見た途端とても楽しい気持ちになりました。幼児たちは、その下で室内遊びをしていたのですが、登園した時からきっとわくわくした気持ちになるだろうと感じました。

また、ある保育室の前には新聞紙でつくった服がありました。ドレスでしょうか、一着ずつハンガーを使って、ラックに掛けられていました。素敵なブティックのようでした。遊びでつくったものを保育者が丁寧に扱うことによって、子どもたちも大切に扱い、「これを使いたい」という、次の遊びの意欲につながるのだと思いました。また、靴箱の近くに、ペットボトルとジップ付きの袋を組み合わせたものに紐が通してあるバッグが、きれいに並べて掛けてありました。外へ出掛ける時に持って行き、取って来たものをその中へ入れるのだそうです。一人ずつ名前が書いてあることで、バッグ自体が「自分のものである」という認識ができます。また、靴箱の近くに置いてあることで、忘れずに持って行くことができ、探検への意欲が高まります。そして、持ち帰ったものは、次の遊びに使うこともできます。年齢に応じて少しずつタイプは異なるようですが、丈夫な袋を使うことで、何度でも繰り返し使うことができるところがよいと思いました。園の中では、視覚に訴える工夫がたくさんありました。子どもたちの「やりたい」という気持ちを支える環境構成について、さらに学ばせていただきたいと感じました。

園庭における子どもたちとのやり取りから

園庭では、異年齢児が一緒に思い思いの遊びに夢中になっており、とても穏やかな雰囲気でした。A児が園庭で虫を捕まえ、バケツの中に入れて友達に見せていました。「僕が捕まえたんだ」と誇らしげで、私にもすぐに見せてくれました。B児も餌となるものを見付け、世話をしようとしていました。A児は「こういうの見付けた」と、先生に見せました。B児が触ろうとすると、それを「ひっくり返るからだめ」と言いました。その後、虫を見ながら、A児と先生とのやりとりがありました。しばらくすると、ひっくり返っていた虫がまた元に戻った様子を見て、先生は「あ、今ひっくり返ったけど戻ったよ。じゃあB児が触っても大丈夫だね」とお話されました。子どもたちの思いを汲み取り、すぐに助言をするのではなく、子どもたちが納得できるタイミングを見計らい、話をされたのだと感じました。

B児はその後、他の友達にも虫を見せに行きました。年下の園児が虫を怖がる様子を見せると、棒に虫を乗せて「ほら、これなら大丈夫？」と聞きました。異年齢で同じ空間で遊び、年下の子を思いやる様子が微笑ましかったです。

6月5日　B園の参観を受けて、自園の保育を捉え直す

今回の訪問では、タイミングのよい援助の方法について、捉え直すことができました。自演では、園庭から掘り起こした粘土に水を加えて捏ねて、好きな形をつくって遊ぶ「粘土遊び」がブームとなっています。朝一番に園庭へ向かって土を掘り、どうすればちょうどよい硬さの粘土ができるかを試行錯誤しています。年長児から、水の量を教えてもらっている姿もあります。つい「こうした方がよいのでは？」と口出ししたくなってしまいますが、子どもたちの様子を見守ることを第一にしようと思いました。次第に型抜きをしたり、草花で飾りつけをしてお菓子に見立てたりするようになりました。

そんな時、年少クラスE児が興味をもって寄ってきました。触ろうとするとO児は壊されると思ったのか「だめ」と拒否していました。しかし、E児はどうしても触ってみたいようで「これ、なに？」と何度も尋ねたのですが、O児の対応は変わりませんでした。私はE児に「どうしたの？」と尋ねました。するとE児は「これ何かなあと思ったの。こうやってやりたいの」と話しました。E児の興味や思いが高まっていると捉え、O児に対して「O君の粘土、とっても楽しそうだから触りたいみたい」と話しました。すると「ふうん、じゃあいいよ。これもいいよ」と、粘土を渡していました。いつ、どのタイミングで声をかけるか、常に迷うことですが、B園の先生方のように、子どもたちの様子をよく見て、タイミングよく援助をしていくことを心がけたいと思いました。

〔上越教育大学　山口美和先生のコメント〕

B園の環境構成や、保育者と子どもとのやり取りの中に、教育的意図に基づいた保育者のさりげない配慮や援助があることを感じ取られた様子が伝わってくるレポートです。自分の力で捕まえた虫や、頑張って作り上げた作品などは、子どもが心から大切に思う「宝物」です。だからこそ、他の子どもたちは羨望のまなざしでそれを見つめ、「触れてみたい」「自分でも作ってみたい」という思いを持って、その子の周りに集まってきます。保育者は、大切な「宝物」を壊されたくない子どもの気持ちと、「宝物」への憧れを持つ子どもの気持ちの双方を受け止め、子どもたちの橋渡しをしたいものです。粘土あそびで水をどれくらい加えればちょうどよい硬さになるかを考えながら遊ぶことは、「量」という数学的な知識につながる活動でもありますので、子どもの試行錯誤を通した学びを見守る先生の姿に共感しました。

附属幼稚園・B園　交流だより　その5

令和6年7月31日発行
令和6年6月25日交流

6月25日　B園を参観して　～虫探し～

参観に伺った10時頃は、ちょうど園児たちが外へ出かける時間帯で、お散歩へ出かける幼児、園庭で遊ぶ幼児、それぞれが準備を始めていました。４歳児は、どろんこ遊びの服装になって玄関から出てくるところでした。玄関前には、コンテナに入ったスコップやバケツなどが、みんなが選ぶだけに十分な数が用意されて種類別に置かれており、幼児はその中から自分が必要な物を選んでいました。コンテナの中に入っている物を見比べて「やっぱりこれかな」と、持ち替えている子もいました。きっとこれまでの遊びの経験から、自分がしたいことに合わせて選んでいるのだと思いました。

その中で、A児はコンテナを何度も見ながら、何かを探しているようでした。最終的に、片手に大きなしゃもじ、反対の手にはブルーのスコップを持っていました。何をするのかと思って追ってみると、バケツを持ったB児と一緒に砂場へ向かいました。「これでハサミムシを捕まえるんだ」と、A児とB児のしたい遊びは決まっていたようで、砂場に着くと、覆っていたシートを、しゃもじとスコップを使ってめくり始めました。シートは重さがあり、幼児が簡単に動かせるものではなかったのですが、A児は「この奥にいそう」と、シートの下にしゃもじを入れて持ち上げ、シートの下を探していました。B児も同じように、一緒になってスコップをシートの下に入れ、ぐっと持ち上げてシートの下を探しました。なるほど、このためにしゃもじとスコップを選んで持って行ったのかと感心しました。前日、シートの下にたくさんのハサミムシがいたことを担任の先生からお聞きしました。A児とB児は、今日もハサミムシを捕まえたいという思いがあり、長い棒があればシートの下を探すことができるという経験があったからこそコンテナの中からしゃもじとスコップを選んだのでしょう。たくさんある用具の中から「これならできるだろう」「これなら捕れるだろう」という自分なりの感覚でこの２つを選んでおり、まさに主体的な姿なのではないかと感じました。

「ハサミムシ出てこーい」「いそうだけど、いないんだよね」「いるかな？いる？」と、A児のハサミムシに対する思いは強く、シートの奥の方まで探していました。この日は、たらいの近くで色水遊びを楽しんでいた子が多かったのですが、A児は、B児とずっと一緒にハサミムシを探していました。しばらくすると、担任の先生が砂場へ来てA児に「ハサミムシいた？」と声をかけて、シートの下を見ました。見つからないことをA児が伝えると、「あんなにいっぱいいたのに、どこにいったんだろうね」と、A児に寄り添う声かけをされました。周りの子にも「どこにいったんだろうね」と声をかけると、近くで色水遊びをしていたC児が「ここにいるんじゃない？」とブロックを指しました。これまで、シートの下を一生懸命探していたA児とB児が、初めてブロックに着目しました。先生がブロックを持ち上げると、小さなハサミムシが一匹出てきて、見事に捕まえることができました。ずっとハサミムシを探しているA児の気持ちに共感し、周りの子にもさりげなく声をかける先生の姿がとても素敵だと感じました。C児の意見がなければ、きっとこのハサミムシを見つけることはできなかったと思います。A児がハサミムシを捕まえることができ、C児もうれしかったに違いありません。最後、A児は捕まえたハサミムシを逃がしてしまいます。先生から捕まえたハサミムシの数を尋ねられて「ゼロ」と答え、続けて「さっきのは、赤ちゃんだったから、数に入れないよ」と話していました。きっと、もっと大きなハサミムシをねらい、次の日もしゃもじとスコップを持って、ハサミムシ探しが続くのだろうなと思いました。

前日、たくさんのハサミムシを見つけたから、また今日も同じように見つけられるとは限りません。それでも根気よく探し続けるA児の姿がありました。子どもたちの様子をしっかり捉えてその思いに共感し、時には周りの幼児にも問いかけるなどして、援助していくことが大切だと感じました。

6月25日　B園を参観して　～色水遊び～

園庭では、たくさんの幼児が色水遊びに夢中になっていました。先生が蓋の裏に絵の具を付けて、幼児がそのペットボトルを振ると、透明の水に色が付き、幼児はその様子を楽しんでいました。

その中で、D児が「やったあ！やったあ！」と大きな声を上げました。何事かと思っていると、D児は私の所へ来て「見て！紫になったよ！赤に青を入れると、紫になるんだよ！」と興奮した様子で話してくれました。その後、園庭にいる全ての先生方にペットボトルを見せながら回っていました。後ほど担任の先生にお聞きしたことによると、前日までは一色だった絵の具を、この日は二色にしたのだそうです。紫をつくろうと思って色を混ぜたわけではなく、D児の中では偶然できたものだったのです。ある先生が「それ、どうやってつくったの？」と尋ねるとD児は「赤を力いっぱい入れると、紫になるんだよ」と答えました。先生はそれに対して「そうか、じゃあ私も力いっぱい入れるね！」と声をかけました。D児はこの日の外遊びの時間、自分がつくった紫色の色水が入ったペットボトルをずっと持ち歩いていました。途中で他の遊びをすることもありましたが、自分の横に置いてとても気に入っているようでした。大人にとって当たり前だと思うことでも、子どもたちにとって新たな発見であることがたくさんあります。今回のD児の興奮ぶりは、こちらも驚くほどでした。子どもたちの目線に立って物事を見ることを忘れず、一人一人の喜びや驚きに共感できる保育をしたいと思いました。

6月25日　B園での研修に参加して　～協議会～

当日の保育の様子とともに、主体性を育む保育のあり方、子どもの見取りと援助、環境構成などについてご指導いただきました。この日、５歳児クラスは、生き物捕まえをするために園外へ散歩に出掛けました。しかし、園庭での泥遊びがしたいとの思いをもっていたそのうち４名の幼児は園に残り、その子たちは他の先生に見てもらうことになりました。このように「残る子どもたちをお願いします！」「いいよ！」と互いに言い合えることは、職員がチームで動いているからこそだとお話されました。この日、散歩に出掛けた５歳児クラスが戻ってくると、園庭にいた職員も子どもたちが「お帰り！」「どうだった？何かいた？」と温かく迎えており、B園の先生方全員で、この園の子どもたちを保育しているのだと感じました。「先生たちが楽しいことは、子どもたちが楽しいことにつながる」「先生たちの仲がよいことは、子どもたちの仲がよいことにつながる」との言葉に、思わず納得しました。私も、職員の方々と一緒に楽しみながら保育をしたい、と自分を振り返るよい機会になりました。

また、他の子と比べてできない所を見たり、苦手を責めたりするのではなく援助を丁寧に行うこと、子どもをまるごと受け止めることなど、保育に大切なことを教えていただきました。つい、目先のことばかり気になってしまうのですが、一人一人のことをしっかり見取り、その子の育ちを捉えようと気持ちを新たにしました。

7月10日　B園の参観を受けて、自園の保育を捉え直す

今回の訪問で、職員がチームで保育することの大切さについて捉え直すことができました。７月のある日、遊びの時間が終わって片付けに入ろうとする頃、E児が出会いの広場に向かって椅子を運び「コンサートが始まるよ」と、呼びかけているところでした。私はE児に「みんな片付け始めるけど、どうする？」と尋ねると「１回だけ踊りたい」とのことだったので、私と数名の子どもたちはE児が並べた観客席に座りましたが、なかなか始まりません。すると、E児が「この席にみんな座ったら始めます」と言いました。この後の活動を考えると時間は限られていますが、たくさんの椅子を並べたE児が得意な踊りを披露する機会も大切にしたいと思い、私はE児と一緒に周りの子どもたちに声をかけに行きました。しかし、すぐには集まりません。他の子どもたちは片付けを始めています。私は、焦る気持ちをおさえながら椅子に座りました。

すると、５歳クラスの担任がE児に声をかけながらコンサート会場へ来てくれました。また、３歳クラスの担任と副担任も、子どもたちと一緒に来てくれて、席がお客さんでいっぱいになりました。会場では温かい手拍子の中、ダンスを披露したE児はとても満足そうな表情を浮かべていました。一番慌ただしい時間帯であるはずなのに、E児の思いを大切にして会場へ足を運んでくれた先生方、そして他の子どもたちの片付けを促して対応する先生方の連携が本当にありがたくまさにチームとして動いていると感じられる時間でした。

他の先生方が集まり、E児のことを支えられたのは、全職員がE児のことをよく理解していたからではないかと思います。もちろん、毎回同じように対応できるわけではなく、折り合いをつけなくてはいけない場面もあると思います。しかし、今回最後まで一人で踊りきったE児の気持ちは満たされ、これからの自信につながるだろうと思いました。職員がチームとして動くためには、子どもたちの情報共有が必要不可欠です。職員集団の一員として伝え合い、話し合いながら、子どもたちの保育に携わりたいと思いました。

〔上越教育大学　山口美和先生のコメント〕

B園での参観を通して、遊びの中での子どもたちの試行錯誤の様子や、色水の変化に驚き、感動する子どもの姿に触れ、刺激を受けたことが伝わってきます。キャップに絵の具を付けておき、水の入ったペットボトルに蓋をしてボトルを振るとその色が水に溶け出てくるという遊びは、ちょっとした実験のようで、大人が試してもわくわくしそうです。一人ひとりの子どもがしたいことをできるようにするために、職員同士が協力し助け合って、みんなで子どもを見ることのできるB園の先生方の関係は素敵ですね。附属幼稚園でも、普段から子どもの様子を共有し合っているからこそ、E児の思いを叶えるために、コンサート会場に多くの先生方が集まってくれたのだと思います。他園のチーム保育の状況を目にしたことは、カンファレンス等を通しての日ごろからの情報共有が、子どもの願いを実現するための教師同士のサポートに結びついているという、附属幼稚園のよさにも気づくきっかけになったのではないでしょうか。

附属幼稚園・G園　交流だより　その1

令和6年5月10日発行
令和6年5月 2日参観

5月2日　G園を参観して　～遊びの中で捉えた幼児の姿①～

【写真1】

A児がスコップで木を叩いていました。何が楽しかったのか、気になって近くに行ってみました。A児は、しばらくの間、ずっと木を叩き続けていました。近くにいた私に気づいたA児はキラキラした表情でこう言いました。「ねえ、僕が木を『パン』ってやったらさ、木がちょっと割れたんだよ！」　この言葉を聞いたとき、A児は、スコップで木を叩き、木が割れることが楽しみなのではないかと捉えました。

【写真2】

しばらくA児を見ていると、スコップの使い方が変わりました。これまでは思い切り木にスコップを叩き付けるような使い方だったのが、スコップの先端を木に挿し、押すようにしていました。「割れないなあ」とつぶやきながら、何度も試していました。

【写真3】

またしばらくすると、A児は高いところからスコップを振り下ろしていました。これは「薪割り」の動作ではないかと捉えました。この「薪割り」も、「割れないなあ」とつぶやきながら、何度も試していました。近くで様子を見ていた私と目が合ったとき、A児はまた目を輝かせながら、こう言いました。「木を『パン』ってやるとさ、上の葉っぱも動くんだよ！あとね、僕の手も『ピーン』ってなるよ！」

たまたま樹木の皮の隙間にスコップが当たり、割れたように見えたことから始まったA児の遊び。A児はどうやったら木が割れるんだろうと自ら疑問をもち、スコップの使い方を多様に試し、その中でまた木を叩いた時の反動についてまた気づいていく、そんな姿を見ていたら、A児の「自分で育とうとする力」に、心を動かされました。

5月2日　G園を参観して　～遊びの中で捉えた幼児の姿②～

【写真4】

B児は、砂場の端にいた私に「ねえねえ、早く来て！」と、意気揚々と話しかけてくれました。行ってみると、バケツの中に砂が山盛りに入っていました。B児は山の頂上に指で小さな穴を空けると、「これから爆発するよ！」と言って、その砂の山に水をかけました。水で砂が流され、本当に火山が「爆発」したかのように見えました。何より感動したのはB児の表情でした。「爆発」を考えついたB児は、言葉では表せないような光り輝く笑顔で、何度も試していました。

途中、近くにいたC児に、水がかかる場面がありました。C児はB児に水をかけられたのだと思ったのか、怒ったような表情でB児の靴に水をかけ返しました。B児はそれでも「ねえ、（Cくんも）一緒にやらない？」と「爆発」の遊びに誘っていました。C児はB児と一緒に笑顔で「爆発」を楽しみました。C児が「爆発」を試したのはほんの数回ではありましたが、自然とかかわりが生まれた瞬間であったと捉えました。「かかわりは、遊びに夢中になる中で自然に生まれてくるもの」であると捉えています。B児が「爆発」という夢中になれる遊びに出会えたからこそ、かかわりが自然と生まれたのだと思いました。

5月2日　G園を参観して　～遊びの中で捉えた先生方の姿～

G園の先生方の保育は、本園が目指すべき姿ではないかと思いました。まず、先生方が子どもを主体にする黒子のような存在でした。保育者の声のトーンや大きさ、姿勢、立ち位置、本園の理想とするものなのではないかと捉えました。そして、黒子に徹するだけではなく、くらしをともにつくる仲間のような存在でもありました。一緒に汗を流して砂場に穴を掘り続ける姿、かき氷屋さんのお客さんとして遊びの援助をする姿など、遊びが発展するきっかけを、子どもの思いに合わせてつくっていました。

そして、保育中に幼児の発見や感動を共有している姿が、本当に楽しそうでした。【写真5】【写真6】のように、1つのクラスだけではなく、どのクラスもそうでした。「（この子は）いろんなこと考えてるんだね」などと話す保育者の楽しさが、きっと子どもたちの楽しさにもつながっているのではないかと捉えました。

先生方が楽しそうに共有する姿を見ていたら、私も、自分が捉えた発見や感動を先生方に伝えたくなりました。そこで、先に書いたA児・B児の姿を、年中クラスの先生に伝えました。年中クラスの先生もA児・B児がしていたことを肯定的に捉え、A児がつくる意味に共感してくださりました。年中クラスの先生との対話を通して、先生方が同じ方向を向いて楽しく保育をしている、この素敵な保育園の仲間になれたような気がして、とても嬉しくなりました。

5月2日　G園の参観を受けて、本園の保育を捉え直す　～焦りすぎていたのかもしれない～

私も、G園の先生方のように、子どもたちの発見や感動、心の動きを保育者で分かち合い、喜び合いながら保育がしたいと願っています。頭では分かっているのですが、４月は新たな環境になり、不安や焦燥感のようなものがあり、保育をしている中であまり心の余裕がない自分の姿に気付きました。５歳クラスでは例年、片付けの際に「うみ組パトロール」と称して、園全体の片付けの役割を担います。５歳クラスとしての自覚をもってほしいという願いが先行し、その焦燥感が子どもにも伝わってしまっていたらどうしようか、という不安もよぎりました。以前、G園の先生が「今日の援助が子どもを支えているどうか分かるのは、今日ではないかもしれない。長期的に子どもの育ちをみることが大切だ」と語っていたことも、この時思い返しました。もう少し、長期的な育ちを願うことで、「今」の子どもの思いに寄り添い一緒に発見や感動を喜び合えるような保育をしていこうと捉え直しました。

この日、G園から本園に戻ると、片付けの時間でした。D児は、みんなが片付けをしている時、一人で畑に行って何かをしていました。「５歳クラスとしての自覚」ということが頭に浮かびましたが、あえて声はかけず、D児が何をしたいのか、しばらくその様子を見守ることにしました。D児が戻ってきたとき、D児の手には、畑の粘土質の土を使ってつくった、ちょうどよい固さの泥団子をもっていました。私は心が動き、「すごいのつくってきたね！」と、副担任と一緒に共有し、D児にもその感動を伝えました。D児がきっかけとなって、泥団子の遊びを他の子どもたちも楽しむように始まったのです。

D児が「うみ組パトロール」をするのは、まだまだ先かもしれません。しかし、それでよいのではないかと捉えました。D児の心の動きを副担任と一緒に捉えながら、少し長い目でD児の育ちを捉えていきたい、そして、D児の育ちが見られた時には、副担任と一緒にその感動を共有して喜び合いたいと思います。G園の先生方の保育を見て、また自分を捉え直し新たな気づきがありました。「つながる」ことは本当に大切だと思いました。

〔上越教育大学　髙田俊輔先生からのコメント〕

子どもたちの遊び込む姿が伝わる交流だよりを興味深く拝読いたしました。いきいきとした子どもたちの姿が映る素敵なお写真からは、G園の安心・安全な保育環境が目に浮かびます。今回の交流だよりの記録で興味深い点は、附属幼稚園の先生がG園の先生方の姿を「黒子」という演劇の比喩で形容されていることです。子どもたちが園という舞台の主役として伸び伸びとパフォーマンスできるように、保育者は最良な環境や必要な小道具を準備して舞台を整え、主役たちが困ったときには影で支えるようなイメージとして解釈しました。それはまさに、保育者の専門性の一つであると思います。とはいえ、大人の側が黒子になることは容易なことではありません。私も日々の大学生・大学院生への指導で議論が白熱すると、主役であるはずの彼らを置いてきぼりにしてしまい、あたかも自分が主役か著名な演出家であるかのようにふるまってしまうことに後から反省することがあります。主役が輝けるように彼らを「信頼して待つこと」が大切であることは分かっているのに、保育者・教育者側が黒子に徹しきることはとても難しいですね。今回の附属幼稚園－G園の交流だよりを読ませていただき、私自身も自らの教育実践を見直すきっかけになりました。今後の交流も楽しみにしております。

交流だよりを読んだ感想

A児がスコップで木を叩く遊びの考察に驚かされました。子どもを見る視点に気付かされ自分の保育を見直してみました。
すると、より子どもたちの心の動きが見えてきて小さなことでもキラキラと輝き、毎日が感動でいっぱいなのだと感じました。

附属幼稚園・C園　交流だより　その4

令和6年7月 8日発行
令和6年6月11日交流

6月11日　C園を参観して

昨年度に続き、今年度もC園と交流させていただけることに、大変ありがたく感じています。6月11日に、今年度初めての参観をさせていただきました。今年度は私が3歳クラス担任ということで、3歳クラスを参観させていただきました。この日、3歳クラスの保育室へ行くと、自由遊びの時間でした。A児は、「食べていいよ」と言って、私のところにお料理を持ってきてくれました。私が受け取ると、「ちょっと待ってて」と言って、スプーンを持ってきてくれました。相手のことを考え、行動する姿に感動しました。しばらく、お料理のやりとりをしたあと、今度はブロックで遊び始めました。「これは、恐竜なの」と言って恐竜を3つつくりました。そうしているうちに片付けの時間になりました。夢中になってブロックで遊んでいたA児が、どうするのかと見ていると、「見て見て！恐竜がおもちゃ片付けるの」と言って、2つの恐竜でおもちゃをはさみ、かごに運んでいました。楽しみながら片付けをしている様子を見て、きっとこれまでも先生方と一緒に楽しみながら片付けをしてきたのではないかと読み取りました。

しばらくして、全員がホールに集まり、体操をする時間になりました。B児は、みんなと一緒にホールに出たものの、なかなか落ち着かず、不安な様子が見られました。担任の先生は、B児に声をかけると、一緒に保育室に戻り、B児の落ち着く場を提案していました。B児のいる所からは、ホールにいる担任の先生の姿がよく見えました。B児は、ホールにいる担任の先生と視線を合わせながら、ホールから聞こえてくる音楽に合わせてその場で体操を始めました。この様子を見ていて、担任の先生のB児に対する深い幼児理解があり、B児との間にしっかりとした信頼関係があることを読み取りました。B児の様子を読み取った担任の先生は、B児が落ち着いて体操に参加できる場をつくり出していました。その距離感が絶妙で、他の幼児は目に入らないが、担任の先生とは視線の合う場所でした。B児は担任の先生と視線を合わせながら、安心して体操をすることができ、うれしかったのではないかと読み取りました。B児は終始、笑顔で体操をしていました。

今回の参観で、改めて幼児理解の大切さ、幼児のありのままを受け入れることの大切さを実感しました。入園したての3歳児だからこそ、幼児が安心して過ごせる空間を大切にしているのだなと感じました。これからも幼児一人一人のありのままを受け入れ、それぞれに合った時間や場を保障していきたいと考えました。そして、片付けも楽しんでいたA児のように、保育者も一緒に楽しみながら生活を共にしていきたいと捉え直しました。

6月21日　C園の参観を受けて、自園の保育を捉え直す

片付けの際、なかなか片付けに思いが向かず、遊び続ける幼児がいます。他の幼児の片付けが終わって、保育室へ戻るタイミングになっても、なかなか戻ってくることができない日もあります。担任は、どんな言葉をかけると気持ちが次の活動に向くのかを考え、試行錯誤しました。そんな時、C園の保育を参観させていただく機会がありました。C園では、その子のその時の様子をよく読み取り、その子に合った場と時間を保障していました。担任は、これまで保育室に戻らせなくてはという思いが強く、その子の思いに寄り添うことができていなかったのではないかと振り返りました。

ある日、C児は他の幼児が保育室へ入っても、外で遊び続けていました。担任は、どんな言葉をかけようかを考えながら、C児に近づきました。「何してるの？」と聞くと、「これ探ってるの」と話してくれました。C児は手に木の実がいっぱい入っている袋を持っていました。担任は、それだけ思いをもって遊んでいることをうれしく思いながら、きっとまだ木の実を探り続けたいのではないかと読み取りました。「先生、お部屋でCくんとみんなで楽しいことしたいんだけど、Cくんどうする？」「うーん。これ探りたい」「そうだよね。もっと探りたいよね」「うーん。じゃあ、あと3こ探ったらお部屋行く！」「わかった。そうしよう」担任はC児とやりとりをしながら、C児が自分で折り合いをつけて、保育室へ戻ることを決められるように言葉をかけました。誰にも邪魔されず、木の実を探る時間を保障されたC児は自分で保育室へ戻ることを決め、笑顔で担任と一緒に保育室へ戻りました。

別のある日、「みんなの時間」で製作をしていた時のことです。「終わった」「できた」とそれぞれのタイミングで活動の終わりを決めて、昼食の準備に取りかかっていました。他の幼児が昼食の準備が終わっても、D児はなかなか作業を終えることができずにいました。担任が「みんなごはんにするみたいだけど、Dちゃんどうする？」と声を掛けると、「まだできてないんだよ」と話しました。担任は、D児のやりたい思いを読み取り、D児が自分で納得できるまで作業を続けることができるように、「このテーブルはごはんの準備をしたいんだけど、あっちのテーブルならまだできるよ」と別の場を提案しました。するとD児は「じゃあ、あっちでする」と言って、道具を持って移動しました。しばらく作業を続けた後、「先生、できたよ」と製作物を担任に見せに来ました。「すごいね。素敵なのができたね」と話すと、D児は嬉しそうに自分で片付けを始めました。自分の納得するまで作業を続ける場と時間を保障したことで、自分で終わりを決め、次の活動に気持ちを向けられるようになってのではないかと捉えました。

いつもこのように折り合いが付けられる場面ばかりではないかもしれません。どんな言葉をかけても、どんなに時間や場を保障してもなかなかうまくいかないこともあります。しかし、保育者としてその子の思いを尊重し、その思いを実現するためにどうしたらよいのかを考え続けることはとても大切であると考えます。これからもその子の思いはどこにあるのかをよく読み取り、深い幼児理解のもと、援助していきたいと思いを新たにしました。

〔上越教育大学　白神敬介先生のコメント〕

大人でも、片付けが好きな人もいれば嫌いな人もいます、その違いを生み出す背景は何でしょうか。こんな疑問を感じたのは、なかなか片付けが進まない子どもへの関わりに悩む話をこれまでにも何度か聞いたからです。こうした悩みは保育者の多くが持つものではないかと思います。今回の交流では、片付けに思いが向かない子どもの姿と、保育者として子どもの思いを尊重する姿がありました。附属幼稚園の片付けは長い時間を設けて行われていることに以前から感銘を受けていました。それは、子どもが自分の遊びに「かたをつける」ための時間を、子どもの時間感覚に合わせて設けていることであり、その思いへの尊重が根底にあるのだと思います。しかし、時間が長ければそれで良いわけでもなく、だらだらと過ごしてしまうだけになるかもしれません。それを踏まえて、最初の問いへの答えも重ねて考えると、そこには「自分なりの達成や満足」があるのではと思い至りました。片付けは、子どもには基本的に嬉しい時間ではありません。それでも、片付けに向かうなかで、自分なりに上手にできたことや、気持ちに折り合いをつけられた誇らしさを感じることで、意欲的に片付けに取り組めるようになるかもしれません。保育者がどんな上手な働きかけをしても、すべての子どもに片付けを楽しんでもらうことは難しいですが、達成や満足を得ることは可能です。今回、描かれていた子どもの様子には「自分なりの達成や満足」がみられました。大切なことは、「自分なり」を見つけることです。それは、大人の基準で行われる片付けではなく、子どもなりに取り組んだことから得られるものです。大人でも子どもでも、好きな活動にはたいてい「自分なりの満足や達成」があるのではないでしょうか。片付けのなかで、子どもがそれを見つけるのは難しいかもしれません。そのために、保育者の助けが必要であり、それが、子どもの思いを尊重するということの意味だと思います。このことは、片付けに限らず、保育のあらゆる活動に共通するといえそうです。

交流だよりを読んだ感想

私自身も日々の保育に向き合って考える時間がなかったので、今回のように考察や子どもたちの姿をじっくりと観察していただき、すごく考えさせられることがありました。ありがとうございました！！

附属幼稚園・H園　交流だより

令和6年7月25日発行
令和6年6月26日交流

６月26日　H園を参観して

H園の園長先生から「お出かけカンファレンス」の依頼を受けたとき、現在の保育園の様子や園長先生の思いをお聞きしました。H園は、今年度民営化された保育園であり、スタッフも子ども主体の保育を一緒につくりたいという思いをもった新しいメンバーであることを教えていただきました。

私は、この日午前中の自由遊びの時間を参観させていただきました。４歳クラスの保育室では、４歳児と５歳児が一緒に遊んでいました。マジックを使って色水づくりをしたり、廃材を組み合わせて工作をしたりしている幼児がたくさんいました。少し離れたところで様子を見ていると、A児が話しかけてきました。「先生、これくっつけたいんだ」と私の手を引いて、作業をしていたテーブルに行きました。テーブルには、ビニールテープがいくつか置いてありました。A児は、１つのビニールテープを手に取ると、「これで、くっつけたいんだよ。先生、やって」と私に頼みました。私は、参観者であり、保育のじゃまにならないようにと思いながら、「私はどうやったらいいか、分からないんだ」と話しました。しかし、何度も「先生、やって」とお願いに来るA児は、３つのカップをつなぎ合わせて、スムージーの入れ物にしたいという強い思いをもっていることが分かりました。しばらく、やりとりをしていると、A児の目の前で他の幼児がビニールテープを自分で切って使い始めました。そして、ビニールテープを使い終わると、それをテーブルに置きました。私は、ビニールテープの先が芯から離れている状態でテーブルに置かれていることに気付き、A児に伝わるように、「あっ」と言ってそのビニールテープを指さしました。A児はそれに気付き、そのビニールテープを手に取ると、嬉しそうに自分でハサミを持ってきて、ビニールテープを切って、貼り付けました。次に、もう１枚貼り付けようとしたとき、テープの先が芯にぴったりと張り付いてしまいました。A児はどうするのだろうと思いながら、近くで見ていると、A児は、自分でテープをじっくり見て、手で触り、テープの先を探しているようでした。ついさっきまで「先生、やって」と言っていたA児でしたが、自分で切った経験が自信になったのか、今度は自分でテープの先を探し、自分で切って、貼り付けていました。その時のA児は「できた！」ととても嬉しそうでした。この様子を見ていて、やはり「子どもは自分で育つ力をもつ存在」であり、その力を信じることが大切だと捉えました。このような自分でがんばる姿は、H園の先生方の日々の積み重ねがあったからだと感じました。これまで保育者が、幼児の実態に合わせて見守りながら、「少しがんばれば自分の力でできる」という経験を積み重ねてきたからではないかと捉えました。

５歳クラスでは、ダンボールを使って漁船づくりをしていました。私は、先生と子どもたちが一緒に作業をしている様子を見て、とても楽しく、わくわくした気持ちになりました。それは、先生も子どもの目線に立ち、一緒に漁船づくりを楽しんでいたからではないかと捉えました。先生のわくわくした気持ちが子どもたちにも伝わり、その場がとても楽しい空気感に包まれていました。しかし、先生はただ一緒に楽しんでいるだけではなく、保育者としての声かけも絶妙でした。「すごいね」「いい考えだね」などと子どものがんばりを称賛する声かけや「どうやったら立てられるのかね？」と子どもの困っていることを焦点化する声かけがありました。それだけでなく、「〇〇くんが、何かお話したいんだって」と子どものつぶやきを拾って、全体に共有しようとする声かけもありました。保育者として、目の前の幼児の実態から、声かけの必要性を判断し、どんな声かけを、どんなタイミングで行うのかを考えることはとても大切なことだと感じました。見守る場面では見守り、必要に応じて保育者が前に出て行くことも必要であると捉えました。

６月28日　H園の参観を受けて、自園の保育を捉え直す

H園を参観する中で、幼児が「自分でがんばる姿」を見ることができました。その姿は、「少しがんばったら自分でできた」という経験の積み重ねによるものだと捉えました。私も保育の中でそんな瞬間を見逃さないようにしていこうと気持ちを新たにしました。そんなある日、３歳クラスのB児が「捕まえたバッタを紙コップに入れたい」という思いをもち、紙コップに入れた場面がありました。バッタを紙コップに入れますが、バッタがぴょんぴょんと跳ねて紙コップから飛び出していきます。それを見ていたC児は「ふたをすればいいんだよ」と提案します。C児は「テープがあれば、ふたができるよ」と言いました。私は、これまで遊びの時間に紙コップやセロハンテープを提供したことはありませんでしたが、この経験が「自分でがんばる姿」につながるのではないかと考え、提供することにしました。２人でセロハンテープで紙コップにふたをし始めます。これまであまりセロハンテープを使った経験がないために、なかなかうまくいきません。私はそれを見て、手を貸したくなりながらも、「自分でがんばる姿」を大切にしたいと考え、「すごいね。もうすこしだね」などとそのがんばりを称賛する声かけを続けました。すると、「こうしたらいいんじゃない？」などと自分たちでかかわりながら、ふたをつくる姿につながりました。「やった！できた！」長い時間、黙々とつくり続けた２人でした。その日、C児は遊びの時間中、ずっとその紙コップを持ちながら遊んでいました。そして、帰りには迎えに来た母親にその紙コップを自慢げに見せ、「これ、自分でつくったんだよ」と伝えました。

３歳クラスでは、例年虫かごを用意していません。今回のように、「自分で捕まえた大切な虫を逃げないように入れ物に入れたい」という思いから、工夫する姿につなげたいという意図があったのだと、この出来事から改めて感じました。そして教師がその瞬間を見逃さず、少しのきっかけをつくることで、「自分でがんばる姿」につながるのだと改めて実感することができました。

〔上越教育大学　高田俊輔先生のコメント〕

今回の交流は、子ども主体の保育を目指すH園へ附属幼稚園の先生が出向く「おでかけカンファレンス」であったとのこと。附属幼稚園から子ども主体の保育を学びたいというH園からのご要望で実現したとお伺いしました。交流だよりを読ませていただくと、附属幼稚園の先生もH園の保育から多くの気づきを得る有意義な交流であったと感じます。私は特に、保育者が「できる／できない」の間を揺れ動く幼児の姿を見守ることについて考えました。

保育者が幼児を「見守る」ことに関して、幼稚園教育要領解説には次のような記述があります。「教師は幼児と向き合い，幼児が時間を掛けてゆっくりとその幼児なりの速さで心を解きほぐし，自分で自分を変えていく姿を温かく見守るというカウンセリングマインドをもった接し方が大切である」（幼稚園教育要領解説, p. 172、傍線部筆者）。私はこの解説の中で、幼児を「自分で自分を変えていく」存在として捉えている点が重要であるように思います。一般的に教育という営みは、「教える者が学ぶ者に変化を促す」という構図のもとで行われることが多いです。その場合、教える者は、学ぶ者が良い変化をしたかどうか、言い換えれば学ぶ者が「できたかどうか」といった視点からの評価をすることが多くなるでしょう。一方で、今回の交流だよりにおけるH園・附属幼稚園の保育者の語りはいずれも、幼児が「できたかどうか」にこだわらず、彼らの行為や心情に対する共感で溢れていました。おそらく、子ども主体の保育を普段から考えられている両園の保育者だからこそ、幼児が「自分で自分を変えていく」ことを信じて、彼らを温かく見守ることができたのではないでしょうか。幼児なりの達成感を味わうことを重視する幼児教育・保育は、まさに教育の原点ではないかと考えさせられた交流だよりでした。

附属幼稚園・K園　交流だより　その1

令和6年7月22日発行
令和6年6月28日参観

６月28日　Ｋ園を参観して　～遊びの中で捉えた幼児の姿①～

５歳クラスに入ると、空き箱でつくったお手製のカバンを首からかけ、嬉しそうに保育室を歩いているＡ児の姿が目に留まりました。Ａ児は、カバンの中から、２つの穴が空いた画用紙を取り出し、顔の上に載せていました。何をしているのか気になり、少し離れたところで見ていると、「これはね、キュウリパックだよ」と、嬉しそうに教えてくれました。

その後、カバンの中身を全て出し、全部見せてくれました。入っていたのは、キュウリパック、画用紙でつくった手帳、折り紙の財布（中に折り紙の小銭も入っている）、スマホでした。全てＡ児のお手製です。これらを見せてくれた後には、大事そうにまたカバンの中にしまっていました。

その後、Ａ児は「そうだ！」と言って、容器とモールを使って牛乳をつくり、またカバンの中にしまいました。そして、近くにいたＢ児に、「はい、牛乳あげる」と言って、つくった牛乳をカバンから取り出しました。Ｂ児は「ありがとう」と言って、自分のしていた製作を続けていました。しばらくすると、Ｂ児は、Ａ児に「さっきはありがと」と言って、丸いものを渡しました。それは、「２００」と書いてある折り紙のお金でした。２人を見ていて、自然と生まれたかかわりに、感動しました。

このかかわりは、なぜ生まれたのか。そこには先生方の支えがあると確信しました。５歳クラスの保育室は、子どもの楽しそうな声がこだまし、先生の声はほとんど聞こえませんでした。先生は、製作で困ったことがある子の相談役のようになり、一緒にどうすればよいかを考えていました。まさに、私たちも理想とすべき、「子どもたちが主役の保育室」でした。教師は、子どもたちが自分でできる力を信じ、その思いを少しだけ支える存在でした。そして時には、子どもたちと感動を共有する仲間のような存在でした。そのさじ加減が絶妙で、心を動かされました。

子どもたちの遊びは、子どもたちがした経験の中から生まれてくると捉えています。一人一人の子どもたちの「今」の楽しみは何なのか、どのような経験をしているのか、遊びの時間の読み取りだけでなく、くらし全体で読み取っていきたいと思いを新たにしました。

６月28日　Ｋ園を参観して　～遊びの中で捉えた幼児の姿②～

４歳クラスは、雨の中で雨合羽を羽織り、外遊びに出かけていました。赤土のところがちょうどよくぬかるんでいました。Ｃ児が「泥団子をつくりたい」と言うと、周りの子どもたちも「いいね、やろう」と、泥団子づくりが始まりました。

Ｃ児は、手の中でずっと小さな団子を転がし続けていました。「固まるとね、『もにょもにょ』はもうできなくなる」と教えてくれました。Ｄ児は、「私は『でかでか』団子にしたいんだ」と教えてくれました。近くにいた４歳クラスの先生は「そのお団子『まるまる』だね！」と子どもたちを称賛していました。

この遊びを見ていたとき、２つ思ったことがあります。１つめは、子どもの言葉選びが絶妙であるということです。『もにょもにょ』を言い換えるとしたら、「泥が団子になるくらいのちょうどよい粘度にするために優しく丁寧に捏ねること」ではないかと思っています。Ｃ児は、これを絶妙に表現しているから、本当にすごいです。『でかでか』も、「普通の『でか』よりもさらに『でか』い団子」なのではないかと捉えました。

２つめは、保育者が子どもの言葉を大切にしていることです。先生が使った言葉『まるまる』は、きっと先生の「子ども語録」に刻まれた言葉なのではないかと思って聞いていました。

子どもの言葉の意味を知ろうとすることの大切さ、子どもの言葉に寄り添い、保育者も使ってみることの大切さ、そして、このような表現をすることができる子どもへの尊敬の思いを忘れてはいけないと、思いを新たにしています。

６月28日　Ｋ園を参観して　～遊びの中で捉えた先生方の姿～

５歳クラスの担任の先生の運動遊びの支え方から多くのことを学びました。高く積まれた巧技台を登ろうとする子に対して、腕の力でしっかりと押すことを、自分自身の手を使って伝えていました。園長先生と、このことを話題にしていると、先生方が体の使い方や、そうなるためのステップを、大学の周東先生から習っていると伺いました。集会後のハイハイをする運動遊びも、１つのステップであると教えていただきました。周東先生に学ぶことで、先生方が新たな見方で子どもたちの運動を支えている姿なのだと、感動しながら参観していました。

教師自身が新たな見方や考え方ができるような機会があることが、大切です。今の研究の中で行っている交流もそのような機会の１つであると捉えています。

６月28日　Ｋ園を参観して　～遊びの中で捉えた幼児の姿③～

４歳クラスのＥ児は、ドレッシングボトルの中に赤土と水を入れ、それを混ぜ合わせてチョコレートをつくっていました。しばらくすると、泥が沈殿し、泥、砂、水のきれいな３層ができあがっていました。これに心を動かしたＥ児は、このチョコレートを誰かに見せたくて、園庭で出会う人みんなに声を掛けていました。Ｅ児は、友達や先生を呼び止めては、「チョコレート分けてあげるね」と、ドレッシングボトルの先から水を少しだけ出して「お裾分け」をしていました。中には、「水がかかるから、いや」「先生、Ｅくんが水をかけてきた」という子もいました。それでもＥ児はまた違う友達や先生を呼び止めてはお裾分けを続けました。

Ｅ児が粘り強くチョコレートの魅力を伝えようとする姿には感動しました。Ｅ児の心の動きは、計り知れないほど大きかったのでしょう。Ｅ児を見ていて、感情が揺り動かされるような発見や感動が、こんなにも育ちにつながるのだと気付かされました。

６月28日　Ｋ園の参観を受けて、本園の保育を捉え直す

４歳クラスの参観をして以来、子どもが使う言葉に、より着目するようになりました。以前、高いところにある実を採るとき、子どもたちは畑の支柱２本を「く」の字に組み合わせ、その先端で枝をはさみ、回転させて枝を折って柿の実を採る方法を思いついたことがありました。そのとき、子どもは「わにわにばさみで、くるくるすると採れる」と言っていました。大人がこの状況を詳細に説明するより、よほど伝わる言葉ではないかと振り返りました。私の「こども語録」に確かに刻まれている言葉です。

７月のある日、園庭でカナヘビを捕まえたF児が、木切れを組み合わせてカナヘビの家をつくっていました。直方体になるように組み立てると、家の中に水を飲むところや、ベッドなどをどんどんつくり足していきました。楽しいところには人が集まるもので、５～６人の子どもがF児の遊びに加わりました。みんなで力を合わせてつくったので、カナヘビの家がどんどん大きくなり、カナヘビが、家じゅうを動き回っていました。それを見たF児が「カナヘビのわくわくランドだね」と輝くようなまなざしで言いました。５歳クラスは先週お泊り保育で「わくわくランド」に行って来ました。カナヘビが楽しそうな様子と、自分が楽しかった経験を結び付けて、このように表現したのだと思います。この遊びを近くで見守っていた担任と副担任は、F児の言葉の中にある、カナヘビを楽しませたいという思い、わくわくランドでの経験で大きく心が動いていたことを読み取り、共有しました。そして、言葉選びをする子どもの感性に感動したことを共有しました。

参観を通して、子どもの言葉に感動する心を、そして、子どもの言葉の意味をこれまで以上に考えるきっかけを、いただいたように思います。

〔上越教育大学　吉澤千夏先生からのコメント〕

今回、本学附属幼稚園の中山先生とともに私もお邪魔させていただきました。あいにくの雨でしたが、園舎に足を踏み入れるなり子どもたちの元気な声が聞こえてきて、巧技台や跳び箱で夢中になって遊ぶ子どもたちの姿が目に入りました。その動きの素早さと身体使いの巧みなこと！とてもてびっくりしました。しかし様子を拝見するうちに、子どもたちの年齢や個別的な発達に合わせて、巧技台の構成や活動などを適宜調整する先生方が子どもたちの活動を支えており、その基になるのは本学教員との研修にあることがわかりました。外部講師が子どもたちに直接かかわるだけでなく、保育者がそこから学び、自らが力をつけていくことで、日常の保育の中でまさに遊びを通して子どもたちの発達を支えていく姿を見せていただきました。

また今回、中山先生が子どもたちのステキな遊びの様子やつぶやきをたくさん見つけてきました。なかでも特に子どもたちの言葉に注目されたようです。幼児期の子どもたちの発する何気ない言葉にハッとさせられる私たちですが、子どもたちの言葉はなぜこんなにも興味深いのでしょうか？どうやって生まれてくるのでしょうか？子どもの言葉の豊かさを支えているのは何なのでしょうか？そんなことを考えてみるのも面白いのではないかと思います。

交流だよりを読んだ感想

子どもたちのつぶやきをたくさん言葉に表していただきありがとうございました。このようにつぶやきを具体的にしていくことも、子どもの遊びや行動を知る手立てになるとわかり、たいへん学びとなりました。

令和６年度「つながる保育（第２年次）～園と園のつながりを広げ、深める～」研修ヒストリー

ここでは、研修会議やカンファレンスでどのようなことが検討され、いろいろな園とどのように交流して、つながりがつくられていったのか、その経緯について示す。なお、交流をした園は以下の通りアルファベットにて表記している。

A	市外幼稚園	J	市内保育園
B	市内保育園	K	市外こども園
C	市内幼稚園	M	市内保育園
G	市内保育園	N	県外幼稚園
H	市外保育園	O	県外幼稚園
I	市外幼稚園	P	県外幼稚園

日、場面、参加者	内容	詳細
４月９日 研修 各クラス担任、養護教諭	今年度の研究推進の概要についての検討	○昨年度の研究を基にして、今年度はどのようにつながりを広げ、深めていくことができるかを検討した。 ○交流だよりを蓄積し、保育の質が向上したという事例があると、互いの園にとってよりよいものになると考えられる。そのための第一歩として、互いの園の参観を行うことから始めることを確認した。 ○研究協力園の確認、４月下旬に参観することへの依頼を行い、実践へつなげていくことを確認した。
４月 15 日 研修 各クラス担任・副担任、養護教諭、研究協力者	研究の概要、今後の計画についての検討	○Ｒ５年度の研究協力園とＲ６年度の研究協力園がつながると、さらにつながりが広がると考えられる。新たなつながりを広げるため、その方法や関わり方、参観の場面などについて検討した。 ○フィードバックを活用したり、オープンカンファレンスで互いの園のよさを取り入れたりすることは、保育の質の向上につながることを確認した。 ○交流することで互いの保育がよりよくなったというプロセスを紹介することができるとよい。また、自分の保育を振り返り、よさを取り入れたり高めたりすることができるとよいことを確認した。
４月 17 日 研修 各クラス担任、養護教諭	研究協力園との交流計画の検討	○Ｒ５年度の研究協力園、Ｒ６年度の研究協力園との交流を行うために日程を確認して計画を立てた。 ○それぞれの担任が、どの協力園とつながって交流を深めていくかを検討し、決定した。
４月 24 日 水曜カンファレンス 各クラス担任、各クラス担任・副担任、養護教諭、教育補佐員	最近の保育についての語り合い	○新年度に入り、各クラスの様子について共有した。幼児の気持ちを高める声の掛け方や、帰りの時間までの過ごし方、環境の工夫などについて意見交流を行った。 ○スモールステップで活動を促すこと、３歳児が使いやすいようにプラスチックスコップを砂場の近くに設置すること等を確認した。
４月 30 日 研修 各クラス担任	カンファレンスの方法についての検討	○近隣の園へは職員が直接伺い、遠方の園は現地へ数名が伺い、他の職員はオンラインを繋いでお出かけカンファレンスを行うことを確認した。 ○オープンカンファレンスでは、参加者に予め話題にしたいことを提供してもらうため、オーダーシートを作成することとした。

５月２日 交流（参観） ５歳クラス担任	Ｇ園参観	○５歳クラス担任がＧ園を参観した。 ○長期的な育ちを願うことで、「今」の子どもの思いに寄り添い、一緒に発見や感動を喜び合えるような保育をしていこうと捉え直した。
５月７日 研修 各クラス担任、養護教諭	第１回研究保育の資料についての検討	○研究会でのプレゼン資料について検討した。 ○「しくみ」の定義について確認した。交流したいという思いから、保育が変わっていくことまでを、広い意味での「しくみ」と捉えることとした。 ○カンファレンスでのおたずねシート（オーダーシート）の内容について確認した。
５月８日 オープンカンファレンス 各クラス担任・副担任、養護教諭、教育補佐員、他園職員 8 名	その日の保育を中心に語り合い	【話題になったこと】 ○小学校職員に幼児教育について理解を促すためにはどうするとよいか、小１プロブレムや幼小連携について。 ○幼児の「やりたい」という気持ちを広げられるような環境構成、設定保育と自由に遊ぶ部分のバランスについて。 ○職員の共通認識や連携について。
５月８日 研修 各クラス担任、養護教諭	第１回研究保育の資料についての検討	○「カンファレンス」の名称がどのような過程で更新されていったのかを確認し、表現の仕方について検討した。 ○Ｒ５年度、Ｒ６年度の協力園とどのように関わっていくのかを検討した。今年度は、本園がハブのような役割となり、他の園同士のつながりもつくっていくことを確認した。
５月９日 研修 各クラス担任、養護教諭、研究協力者	第１回研究保育の資料についての検討	○カンファレンスの方法について確認した。本園のカンファレンスが見たい参加者もいるし、ある話題について話したい参加者もいる。限られた時間の中で行うことは難しいが、本園のカンファレンスのかたちで、参加者が話合いに参加できるようにすることを共有した。 ○プレゼン資料の表や図、提示する順番などについて、より伝わりやすくなるように検討した。
５月 10 日 交流だより①発行 ５歳クラス担任	交流だより①の発行	○５歳クラス担任が５月２日にＧ園を参観した際の気付きやその気付きから自分の保育に取り入れた実践を「交流だより①」にまとめ、Ｇ園に送付した。
５月 15 日 オープンカンファレンス 各クラス担任・副担任、養護教諭、教育補佐員、他園職員６名	その日の保育を中心に語り合い	【話題になったこと】 ○「見守ること」は大切だが、人として大事なことは伝えたい。そのバランスが難しい。 ○幼児の対応に困った時は、周りの幼児が代案を考え、教えてくれることもある。 ○「附属だからできる」と思っていたが、子どもたちは変わらない。自分たちの園でもできそうだ。
５月 15 日 研修 各クラス担任、養護教諭	これまでの保育の振り返り	○これまでの保育をクラスごとに振り返り、各クラスの実態とともに紹介した。他園とつながったことによって更新された保育観が、どのように現場で生かされているかを共有した。 ○第１回研究保育に向けての計画を再確認した。

５月 16 日 交流（参観） ４歳クラス担任	Ｂ園参観、合同研修	○４歳クラス担任がＢ園を参観した。 ○幼児が遊んでいる様子をよく見て、タイミングのよい声かけや援助をしていくことが大切だと捉え直した。 ○幼児の製作物や、外へ出掛ける時に持って行くための手づくりバッグの置き場の工夫など、環境構成について捉え直した。
５月 24 日 研修 各クラス担任、養護教諭	研究保育を終えての情報共有 今後の研究の見通しの確認	○研究保育の際に研究協力者と協議した内容について共有した。 ○今後の交流のもち方について確認をした。互いの園の研修に参加できるように、協力園や大学の先生に案内することとした。
５月 29 日 お出かけカンファレンス 各クラス担任、副担任、教育補佐員、他園保育者７名	Ｇ園参観	○５歳クラス担任がＧ園を参観した。参観した際に撮影した写真をもとに、幼児の姿や育ち、保育者の援助についての気付きを資料にまとめた。 ○カンファレンスでは、環境構成について、気になる幼児をどう支えるかについて、交流だよりについて話題になった。
６月３日 研修 各クラス担任、養護教諭	今後の交流についての確認	○８月までの交流について、日時や内容、参加者について確認した。一覧表にまとめ、案内することとした。 ○研究会の案内はがきや園紹介のパンフレットの検討日程を確認した。
６月 11 日 交流（参観） ３歳クラス担任	Ｃ園参観	○３歳クラス担任が、Ｃ園を参観した。 ○幼児理解の大切さ、ありのままを受け入れることの大切さを実感した。幼児の思いを尊重し、実現するためにどうするべきかを考え、それぞれに合った時間や場所を保障し、保育者も楽しみながら生活を共にしたいと捉え直した。
６月 11 日 研修 各クラス担任、養護教諭	おうちえんの活用についての検討 研究会について	○自園の取組を情報発信する手段としての「おうちえん」の活用について検討した。関係者にＱＲコードを配付し、交流の様子やカンファレンスの話題などを発信していけそうだという「おうちえん」利用の可能性について確認した。 ○研究会の講話の演題、講師の先生との打合せ内容について確認した。
６月 12 日 オープンカンファレンス 各クラス担任・副担任、養護教諭、教育補佐員、他園職員５名	その日の保育を中心に語り合い	【話題になったこと】 ○運動会に向けてのダンスや玉入れの様子について。 ○片付けの時間がたっぷりあり、子どもたちの気持ちを聞きながら気持ちを向けている。 ○思ったことを伝え、言ったことが叶う経験が大切である。 ○自分でやることで分かることがある。あまり口を出さず、見守ることの大切さが分かった。
６月 24 日 交流だより②発行 ４歳クラス担任	交流だより②の発行	○４歳クラス担任が５月 16 日にＢ園を参観した際の気付きやその気付きから自分の保育に取り入れた実践を「交流だより②」にまとめ、Ｂ園に送付した。
６月 25 日 交流（参観、研修） ４歳クラス担任	Ｂ園参観、研修に参加	○４歳クラス担任がＢ園を参観し、研修に参加した。 ○自分で道具を選び、根気よく虫探しをする幼児、赤と青の色水を混ぜたらできた紫色の色水に驚く幼児の姿から、同じ目線に立って幼児に共感する気持ちを大切

		にしようと捉え直した。 ○合同研修会では、主体的な保育のあり方、職員全体で保育をする大切さについて話題となった。
６月 26 日 お出かけカンファレンス（参観、リモート） 各クラス担任、副担任、教育補佐員、養護教諭、他園保育者 10 名	Ｈ園参観、語り合い	○３歳クラス担任が、Ｈ園を参観した。 ○本園の職員とオンラインでつないで語り合いを行った。保育者が見守る場面とかかわる場面のバランスや、子ども主体の保育では、どんなことに気を付けて声かけをしているか、環境構成等について話題になった。
６月 28 日 交流（参観） ５歳クラス担任	Ｋ園参観	○５歳クラス担任がＫ園を参観した。 ○子どもたちが使う言葉「子ども語録」を大切に使っている保育者の姿から、子どもの言葉に感動する心、子どもの言葉の意味をこれまで以上に考えるきっかけとなった。
７月８日 交流だより③発行 ３歳クラス担任	交流たより③の発行	○３歳クラス担任が６月 11 日にＣ園を参観した際の気付きやその気付きから自分の保育に取り入れた実践を「交流だより③」にまとめ、Ｃ園に送付した。
７月 10 日 オープンカンファレンス 各クラス担任・副担任、教育補佐員、他園職員７名	その日の保育を中心に語り合い	【話題になったこと】 ○砂場で、石けんを使った泡風呂をつくりたいという子どもや、蝉を捕るためにホースで水を出している子どもにどのように対応するとよいか。 ○子ども主体の保育、丁寧な保育を目指しているが、「先生やって」と言われた時、どこまで手伝うとよいのか、迷いがあることについて。 ○コンサートを開きたいという子どもの思いをみんなで支える職員のチームワークの大切さ、みんなが同じ方向を向いていてこそ、よい保育につながる。
７月 11 日 交流（合同保育） ５歳クラス、Ｃ園職員４名	Ｃ園との合同保育	○Ｃ園５歳クラス 23 名、保育者４名が本園に来園した。 ○Ｃ園保育者と合同で保育をした。
７月 17 日 お出かけカンファレンス 各クラス担任、他園保育者４名	Ｉ園訪問	○各クラス担任が、Ｉ園を訪問した。カンファレンスの前半は、本園職員が参観での気付きをクラスごとに語り、後半は全員で、その日の保育や普段考えていることについて語り合った。 ○担任と補助の先生との連携、一人で対応することの難しさ、異年齢が混ざったクラス運営での悩みなどが話題になった。
７月 22 日 交流だより④発行 ５歳クラス担任	交流だより④の発行	○５歳クラス担任が６月 28 日にＫ園を参観した際の気付きやその気付きから自分の保育に取り入れた実践を「交流だより④」にまとめ、Ｋ園に送付した。
７月 24 日 研修 各クラス担任、養護教諭	２学期以降の交流についての検討	○１学期のカンファレンスの成果と課題について振り返った。多くの声がかかり頼りにされていることが成果として挙げられるが、継続的なつながりを考えると、今後は市内の園との交流をメインに行っていきたい。園同士のつながりに、小学校にも入ってもらうための方法について検討した。２学期以降のカンファレンスの予定を確認した。

７月 25 日 研修 各クラス担任	交流についての気付き	○これまでの交流を振り返り、その成果について検討した。継続して行うことにより、職員の保育観が耕されており、多様な視点で幼児をみることができるようになってきた。また、保育についての自信や安心、喜びや楽しみ等にもつながっていることが見えてきた。
７月 25 日 交流だより⑤発行 ３歳クラス担任	交流だより⑤の発行	○３歳クラス担任が６月 26 日にH園を参観した際の気付きやその気付きから自分の保育に取り入れた実践を「交流だより⑤」にまとめ、H園に送付した。
７月 24 日 研修 各クラス担任、養護教諭	研究の進捗状況の確認と、今後の取組の検討	○これまでの取組から、地域の園からのニーズがあることが分かった。同じ園との複数回のつながりを大切にしていくこと、地域の限定も視野に入れること、小学校とのつながりも意識すること等を確認した。 ○２学期のカンファレンスの日程調整を行った。
７月 25 日 研修 各クラス担任	研究の成果についてのまとめ	○継続した交流から見えてきたことについて検討した。それぞれの取組が自信や喜び、安心や実感につながっており、自身の「保育観の耕し」となっていることが共通認識として挙げられた。
７月 31 日 交流だより⑥発行 ４歳クラス担任	交流だより⑥の発行	○４歳クラス担任が６月 25 日にB園を参観した歳の気付きやその気付きから自分の保育に取り入れた実践を「交流だより⑥」にまとめ、B園に送付した。
８月１日 お出かけカンファレンス 各クラス担任、副担任、他園保育者 10 名	J 園参観、語り合い	○各クラス担任と副担任が、J 園を訪問した。カンファレンスの前半は、本園職員が参観での気付きをクラスごとに語り、後半は全員で、その日の保育や普段考えていることについて語り合った。 ○「遊びの充実」が大切であるという気付き、幼児の思いが異なる時の援助の仕方、安全面への配慮などについて話題になった。
８月２日 お出かけカンファレンス 各クラス担任、副担任、他園保育者 13 名	B 園参観、語り合い	○各クラス担任と副担任が、B園を訪問した。カンファレンスの前半は、参観での気付きをクラスごとに語り、後半は２つのグループに分かれて、語り合った。 ○自分の思いを表現することが苦手な幼児への対応、職員の連携、同じ目線で楽しむことを大切にすることなどが話題になった。
８月６日 オープンカンファレンス 各クラス担任、他園職員５名、小学校職員１名	日頃の保育についての語り合い	【話題になったこと】 ○判断に困る時の対応について。 ○「この子はこうしたい」という思いに気付き、否定をしないことが大切である。 ○大人が「こんなことを？」と思うようなことでも、子どもがやってみたいということを実現できるようにしたい。生活の中にも環境構成をすることが大切。 ○子どもの生活に近い遊びはわくわくする。子どもの気持ちを大切にする活動をしたい。 ○子どもたちが主役である。「なぜ座らない」を「なぜ立っているのか」と捉え、その子なりの理由をそれぞれ考えていきたい。 ○小学校と園とのつながりについて。「主体的な保育」ということに迷子になっている。小学校を見据えると「主体的」というのはなかなか難しい。

８月 20 日 研修 各クラス担任、研究協力者	研究会のプレゼン検討	○今回のプレゼンの軸となる部分をよく検討すること、事例の入れ方についてご指導いただいた。 ○今年度の取組がどのように保育の中で還元されたかが大切となる。手応えについて、再度検討をすることを確認した。
８月 21 日 研修 各クラス担任、養護教諭	研究会のプレゼン検討	○オープンカンファレンス、お出かけカンファレンスについて、参加人数やその内容などを分かりやすくまとめることにした。 ○担当箇所を決め、役割分担を行った。
８月 30 日 研修 各クラス担任、養護教諭、研究協力者	研究会のプレゼン検討	○概要についての検討を行った。取組を通して、誰がどのように感じたのかという職員の実感があるとよいこと、成果に当たる部分の整理をするとさらに分かりやすくなることをご指導いただいた。
9 月 12 日 研修 各クラス担任、養護教諭	研究保育を終えての振り返りと今後の研究について	○第２回研究保育を終え、各クラスの保育トークや協議内容について話題の共有をした。 ○遊びの後の片付けや、室内遊びについて、全体で検討する時間を設けることとした。
9 月 13 日 研修 各クラス担任・副担任、養護教諭、教育補佐員	片付けについて 遊びの場について	○片付けの時間や方法について、現在の様子をふまえ、これからどのようにするとよいか検討した。 ○片付けの時間を長くとることは、園の文化の一つであり、気持ちの折り合いを付ける点ではよいが、それを逆手にとって遊び続ける幼児がいるのが現状である。これまでクラスごとにずらしていた片付け時刻を、一斉で行うことを試みることにした。 ○遊びの場の一つとして、出会いの広場の有効的な活用方法について検討した。
9 月 18 日 水曜カンファレンス 各クラス担任・副担任、養護教諭、教育補佐員	日頃の保育についての語り合い	【話題になったこと】 ○愛着について、家庭でアタッチメントできなくても、園や学校などでもでき、キーパーソンの存在が大切である。 ○幼児のトラブルについて、どのように声をかけると、本人の心に響くのか。
10 月 2 日 オープンカンファレンス 各クラス担任・副担任、養護教諭、教育補佐員、他園職員２名	日頃の保育についての語り合い	【話題になったこと】 ○友達とのかかわりが 1 学期よりもだんだん増えてきたことによって、遊びの幅が広がってきた。 ○子どものやりたいことを、どこまで叶えることができるのか。 ○職員同士でゆっくりと話をする時間をとることが難しいので、意図的に行うとよさそうだ。
10 月 8 日 水曜カンファレンス 各クラス担任・副担任、養護教諭、教育補佐員	日頃の保育についての語り合い	【話題になったこと】 ○生き物を踏みつぶしている幼児がいたら、どのように声をかけるか。 ○園で拾った栗をみんなで分けることや、園の土を使った粘土遊びなど、よい文化を伝承していきたい。
10 月 16 日 お出かけカンファレンス（参観、リモート 各クラス担任・副担任	M園参観と語り合い	○５歳クラス担任が、M園を参観した。 ○本園の職員とオンラインでつなぎ語り合いを行った。 【話題になったこと】 ○子どもの思いを最大限に生かそうとする職員の連携について。 ○子どもの主体性を支える保育について

10月17日 交流（参観） ５歳クラス担任	N園参観	○５歳クラス担任が、N園を参観した。 ○園の垣根を越えた視点を大切にする、アンケートの工夫、進行役を回す、広く取組を公開するなど、本園で実施するカンファレンスを捉え直すきっかけとなった。
10月28日 交流（リモート） ３歳クラス担任、５歳クラス担任、養護教諭	O園と互いの研究内容についての語り合い	○O園と本園の職員をオンラインでつなぎ、語り合いを行った。 ○互いの研究内容について紹介し、進捗状況を語り合った。
10月28日 交流だより⑦発行 ５歳クラス担任	交流だより⑦の発行	○５歳クラス担任が10月17日にN園を参観した際の気付きやその気付きから自分の保育に取り入れた実践を「交流だより⑦」にまとめ、N園に送付した。
11月６日 お出かけカンファレンス（リモート） クラス担任、他園保育者４名	I園と日頃の保育についての語り合い	【話題になったこと】 ○発表会に向けての取り組み方について情報交換を行った。気持ちが高まらなかったり、切り替えが難しかったりする幼児への対応について。 ○廃材を使った工作遊びについて、どのような廃材を集めるとよいか、またつくったものを紹介するための方法についての情報交換を行った。
11月６日 交流（参観） ５歳クラス担任	A園参観	○５歳クラス担任がA園を参観した。 ○製作の時間も、ただ作品が完成することだけを目的にするのではなく、一人一人の育ちを願い、支えていくことが大切であることを捉え直した。
11月13日 オープンカンファレンス 各クラス担任、副担任、養護教諭、他園保育者２名	日頃の保育についての語り合い	【話題になったこと】 ○担任、副担任だけではなく、全ての職員が子どもたちのために保育に携わっている。「自分らしさ」を大切にして、保育することができればよいのではないか。 ○全員同じことができなくても、心配することはない。今、その子にどのように関わっていくかが大切なのではないか。
11月15日 交流（参観） ５歳クラス担任	O園参観	○５歳クラス担任がO園を参観した。 ○言葉を交わすことだけが「かかわり」ではなく、一人一人が遊びに夢中になることで自然とかかわりがうまれるのではないかと捉えた。
11月25日 交流だより⑧発行 ５歳クラス担任	交流だより⑧の発行	○５歳クラス担任が11月15日にO園を参観した際の気付きやその気付きから自分の保育に取り入れた実践を「交流だより⑧」にまとめ、O園に送付した。
12月６日 研修 各クラス担任	研究冊子の検討	○今年度の研究冊子作成について、ページ割と分担を決めた。 ○今年度の成果として、いくつかの事例を写真と共に紹介することを確認した。
12月９日 研修 各クラス担任、養護教諭	研究冊子の検討	○冊子に載せる事例の候補をいくつか挙げて検討をした。
12月11日 オープンカンファレンス 各クラス担任、副担	日頃の保育についての語り合い	【話題になったこと】 ○他のクラスからガムテープを持ってきたのだと、嘘をついてしまった子へどのように声を掛けるとよいか。 ○戦い遊びをしている子どもたちについて。危ないから

任、養護教諭、教育補佐員、他園保育者２名		禁止をするのではなく、場を決めること、ルールを決めるとよいのではないか。
12 月 11 日 研修 各クラス担任、養護教諭	研究冊子の検討	○今年度の研究の成果と課題について、交流の４つの視点（ハブとしての役割、つながるよさの実感、保育の捉え直し、持続可能）を中心に検討した。 ○冊子作成までの日程について確認した。
12 月 12 日 交流（参観） ４歳クラス担任	Ｂ園訪問	○４歳クラス担任がＢ園で合同保育、カンファレンスを行った。 ○遊びの中で喜びや悔しさなど、多様に心を動かすような経験をするとが大切だと感じた。また、その心の動きを支えるための職員の役割分担は欠かせないと感じた。
12 月 12 日 研修 各クラス担任、養護教諭	研究冊子の検討	○冊子に掲載する６つの事例について、内容を検討した。
12 月 13 日 交流だより⑨発行 ５歳クラス担任	交流だより⑨の発行	○５歳クラス担任が11月６日にA園を参観した際の気付きやその気付きから自分の保育に取り入れた実践を「交流だより⑨」にまとめ、A園に送付した。
12 月 13 日 交流（参観） ３歳クラス担任	Ｐ園参観	○３歳クラス担任がＰ園を参観した。 ○幼児と共に生活をつくる仲間となり、うれしさや悔しさなどの共有する仲間であるからこそ、信頼関係がうまれ、幼児が安心して過ごせるのだろうと捉えた。
12 月 16 日 研修 各クラス担任、養護教諭	今後の研究の方向性について	○１年次、２年次の研究の成果と、今後どのように研究を進めていくかを検討した。「つながるしくみ」については整ったので、交流したことが子どもたちのためにどう生きたかを検証する必要があることを共有した。
12 月 17 日 研修 各クラス担任、養護教諭	今後の研究の方向性について	○Ｒ７年度の研究の方向性について検討した。 ・他園から学ぶことは今後も大切にしていきたい。 ・保育の質が向上したことを伝えたいが、検証することが難しい。
12 月 18 日 オープンカンファレンス 各クラス担任、副担任、養護教諭、教育補佐員、他園保育者２名	日頃の保育についての語り合い	【話題になったこと】 ○登園後、支度が終わった子どもたちが鬼ごっこをして走る姿があった。そこで、遊戯室で音楽をかけて、みんなで走ることを楽しむとよいのではないか。 ○環境構成について、それぞれのクラスで何をどのように提供しているかを確認した。来年度以降の参考にするため、保育室の様子を写真に撮っておくとよい。
12 月 18 日 研修 各クラス担任、養護教諭、	研究冊子の検討	○それぞれのページの内容やページ割り、「広がる」「深まる」をどのように示すかを検討した。
12 月 19 日 交流（リモート） 各クラス担任、養護教諭	Ｏ園と互いの研究内容についての語り合い	○O園と本園の職員とをオンラインでつなぎ、語り合いを行った。 ○それぞれの研究について、進捗状況や現在抱えている課題について語り合いを行った。

12 月 19 日 研修 各クラス担任、養護教諭	研究冊子の検討	○これまでの交流が保育に生きていることが伝わるような内容にすることを共有した。 ○今後の冊子作成計画について確認をした。
12 月 20 日 交流だより⑩発行 ３歳クラス担任	交流だより⑩の発行	○５歳クラス担任が 12 月 13 日にＰ園を参観した際の気付きやその気付きから自分の保育に取り入れた実践を「交流だより⑩」にまとめ、Ｐ園に送付した。
12 月 23 日 研修 各クラス担任、養護教諭、研究協力者	研究冊子の検討 次年度の研究に向けて	○今年度の研究の目的や成果を分かりやすく、受け取る側へのメッセージ性のあるものにするとよいこと、他園の方への思いがもっと入るとよいこと等をご指導いただいた。 ○今年度の研究の成果を、来年度どのように生かすとよいかについて検討した。
１月７日 交流だより⑪発行 ４歳クラス担任	交流だより⑪の発行	○４歳クラス担任が 12 月 12 日にＢ園を参観した際の気付きやその気付きから自分の保育に取り入れた実践を「交流だより⑪」にまとめ、Ｂ園に送付した。
２月５日 オープンカンファレンス 各クラス担任・副担任、養護教諭、教育補佐員、他園職員１名	日頃の保育についての語り合い（子ども主体の行事について）	【話題になったこと】 ○お楽しみ発表会を次の週に控え、それぞれのクラスの子どもたちの遊びの様子、発表会での姿について話をした。 ○子どもたちが本当にしたいことを読み取り、見せたいという気持ちを高めていくことが大切なのだろう。
２月 12 日 オープンカンファレンス 各クラス担任・副担任、養護教諭、教育補佐員、他園職員４名	お楽しみ発表会後の語り合い	【話題になったこと】 ○本園の発表会（３歳クラス、４歳クラス）を参観した感想、それぞれの園の発表会の様子、子どもたちが主体の行事のつくり方。 ○観客がいることで緊張してしまったり、興奮してしまったりする子への対応について。
２月 14 日 カンファレンス ５歳クラス担任、他園職員９名	お楽しみ発表会後の語り合い	【話題になったこと】 ○本園の発表会（５歳クラス）を参観した感想、当日までの環境構成や子どもたちへの援助、全員にスポットライトが当たるような進め方などについて。
２月 19 日 オープンカンファレンス 各クラス担任、副担任、養護教諭、教育補佐員、他園保育者１名	日頃の保育についての語り合い	【話題になったこと】 ○一つの行為が、Ａには優しいがＢには優しくないということについて ○発表会は終わったが「今日も発表会をしたい」という子どもたちの姿、発表会後にこれまでしていなかった遊びに挑戦する姿、新たな友達とかかわる姿が見られた。友達のしていることに興味をもつ様子からも、発表会が生活にうるおいを与えている。 ○音楽の力について。音楽とは距離感が大切である。 ○職員の声の掛け方や、タイミングについて。 ○大切なことを上の学年が教える有効性。
３月 17 日 研修 各クラス担任、養護教諭	次年度の研究に向けての検討	○今年度は、つながる保育のしくみを整えてきた。来年度は「心を動かす子ども」「幸せをつくる子ども」などの視点で研究を進め、これまで整えてきたつながりの中で、話題として取り上げていくことを確認した。